

# 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(6) — 1894年の Psychological Review誌掲載論文におけるJamesの感情説の変化 —

## William James's theory of emotion as a pioneer work of affective neuroscience, part 6 — The changes in the James's theory of emotion in 1894 —

佐藤 俊彦\*

Toshihiko SATO

### 1. はじめに

William Jamesの感情学説は、一般には、デンマークの医学者Carl Langeの学説と合わせて、“James-Lange説”と呼ばれることが多い。筆者は、これまでに、このJames-Lange説の中でもJamesの学説に着目し、これまでに5つの拙論(佐藤, 2021a, 2021b, 2022a, 2022b, 2022c)を発表してきた。これらの拙論の中では、求心性神経の作用を重視するようになった歴史的経緯と合わせて、1884年におけるMind誌における論文(James, 1884)の発表後、Langeの学説(Lange, 1885)が発表され、“The Principles of Psychology”(James, 1890)、ならびにその縮刷版である“Psychology: Briefer course”(James, 1892)の出版を通じて、Jamesの学説がどのように変化してきたかを議論してきた。

Jamesの感情学説に関連して、Jamesが著した刊行物としては、先に述べたMind誌の論文、“The Principles of Psychology”、および“Psychology: Briefer course”に続く論文として、Psychological Reviewという学術雑誌に刊行された、“Discussion: The physical basis of emotion”というタイトルの論文(James, 1894)がある。本論においては、このPsychological Review誌に掲載された論文を取り上げて、それ以前の文献で述べられた学説の内容と比べたときに、Jamesの感情学説の内容に大きな変化があったのかどうかを検討したい。

なお、このPsychological Review誌の論文の中では、Jamesの感情学説に対する批判的な意見が多く取り

上げられている。今回の議論の中では、ここで取り上げられた批判的意見の内容の詳細については深く立ち入らないこととし、James自身が自らの感情学説の内容をどのようなものとして考え、学説の一部を修正、ないし発展させていたのかという点を中心に議論を進めたいと考える。

### 2. JamesのPsychological Review論文 (Vol. 1(5), pp. 516-529)の構成

今回取り上げるJamesの論文(James, 1894)が収録されているのは、アメリカ心理学会(American Psychological Association, APA)が刊行する学術雑誌のPsychological Review誌である。この学術雑誌の第1巻、つまり創刊後の最初の巻であって、その中の1894年9月に発行された第5号に収録されている。

このJamesの論文の概要について、Table 1に示す。この論文の内容は、1) JamesとLangeの感情学説の概要、2) 彼らの感情学説に対する反対意見と、それらの意見に対するJamesの反論、および、3) 運動と感覚が麻痺した症例の紹介とJamesの学説の検証という、大きく3つの部分に分けることができる。

冒頭では、JamesとLangeによる感情学説の概略を述べている。次いで、彼らの感情学説に対する反対意見を紹介し、Jamesがこれらの意見に反論を試みている。最後に、運動と感覚に麻痺が生じた症例が紹介されて、その症例の知見から、Jamesの感情学説が正しいかどうかを議論している。

Table 1 James(1894)における主要な議論の内容と該当部分のページ番号

主要な議論の内容	該当するページ番号
(1) LangeとJamesがそれぞれ別個に発表した感情体験に関連する理論の内容について	p. 516
(2) この学説への批判的意見について	
(A) Wundtによる批判の概要	p. 516
(B) Wundtの感情学説	pp. 516-517
(C) 血管運動性の作用(Wundtによる批判①)	p. 517
(D) 感情の生起には動機づけが必要である(Wundtによる批判②)	p. 517
(E) 恐れていなければ恐れの対象にはならない(Ironsによる批判①)	pp. 517-518
(F) 檻に入ったクマを見ても恐怖は生じない(Worcesterによる批判①)	p. 518
(G) 檻に入ったクマが恐ろしくない理由 (連合による状況全体の作用に基づいたJamesの説明)	p. 518
(H) Shylockは金を貸したから怒ったのか?(Worcesterによる批判②)	pp. 518-519
(I) 身体反応の多様性と感情体験の強さ(WorcesterとIronsの両者による批判①)	p. 519
(J) 身体反応が変化しても感情体験が同じであり続けることは可能なのか? (Lehmannによる批判と「動機のある」感情)	pp. 519-520
(K) 身体反応の個人差(Ironsによる批判②)	p. 520
(L) 身体反応の知覚だけ特別扱いしているのか?(Ironsによる批判③)	pp. 520-521
(M) 身体反応を知覚すること自体は感情ではない(WorcesterとIronsの両者による批判②)	pp. 521-522
(N) 感情体験をめぐる問題と「体験の質」(IronsとWundtなどの研究者による批判)	pp. 522-524
(O) 感情の階層的性質と心身の相互関係の問題(批判的意見についての総括①)	p. 524
(P) どのような体験を感情と呼ぶのか?(批判的意見についての総括②)	pp. 525-526
(3) 感覚が麻痺した症例	
(A) 全身が麻痺した症例(Berkleyの2人の症例)	p. 526-527
(B) 全身が麻痺した症例(Sollierの症例)	p. 527-528
(C) 催眠誘導の事例(Sollierの事例)	p. 528-529
(4) 結論と今後の課題	p. 529

以下では、このJamesの論文を、Table 1に示す部分に分けて、それぞれの部分ごとに概要を説明しながら、Jamesの感情学説に対して、何らかの修正が行われていたのかどうかを検証することとしたい<sup>1)</sup>。

### 3. 論文の内容

#### 3.1 JamesとLangeが提唱した感情学説

ここでは最初に、この論文の冒頭の段落について確認しておきたい。この段落の最初に一文で、Jamesは次のように述べている。“In the year 1884 Prof. Lange of Copenhagen and the present writer published, independently of each other, the same theory of emotional consciousness.”(James, 1894, p. 516; 筆者

訳:1884年に、コペンハーゲンのLange教授と、本論の筆者とが、それぞれ独立に、感情体験に関する同様の理論を発表した。)

ここで最初に指摘しておくべき点として、JamesとLangeの感情理論の内容とは別な問題ではあるものの、Langeの論文の発行年は1885年であって、この点はJamesの側の発行年の記憶違いではないかと思われる<sup>2)</sup>。次いで、JamesとLangeとが、双方独立に同様の感情理論を提唱したと述べている点については、いわゆる“James-Lange説”が成立した歴史的背景を理解する上で重要なポイントであるだろう。歴史的事実の確認として、JamesとLangeが協力して作り上げた学説ではなく、両者がたまたま、ほぼ同時期に、同様

の学説を提唱したということである。さらに留意すべき点としては、Jamesが、“the same theory of emotional consciousness”、つまり、「感情体験に関する同様の理論」を両者が独立に提唱したと述べている点である。後述するように、Jamesは、Langeの学説の内容には、Jamesの学説の内容とは異なる部分があることを述べており、Langeの学説の内容に対して批判的な意見さえ述べていることもあったので、ここで“the same”と書いていても、まったく同じ内容ではなく、「ほぼ同様の」といったニュアンスで述べられているように思われる。

次の文では、“They affirmed it to be the effect of the organic changes, muscular and visceral, of which the so-called 'expression' of the emotion consists.”(James, 1894, p. 516; 筆者訳:この著者たちはそれぞれに感情体験について論じ、この種の体験が筋肉や内臓活動といった、いわゆる感情表出の構成要素となっているような身体変化の結果生じるものであることを主張した)と述べており、彼の学説が、感情体験の生成過程として、感情表出に関連した身体変化に着目した学説であることが述べられている。

これに続いて、感情体験の生成過程について、より具体的に説明がなされている。“It is thus not a primary feeling, directly aroused by the exciting object or thought, but a secondary feeling indirectly aroused; the primary effect being the organic changes in question, which are immediate reflexes following upon the presence of the object.”(James, 1894, p. 516; 筆者訳:感情体験は、対象物や思考の内容から刺激を受けて直接に生じた一次的な体験ではなく、むしろ、間接的に引き起こされた二次的な体験である。感情を直接に生み出す作用としては、ここで議論の対象となっている身体変化であって、こうした身体変化は、対象が出現した直後に続いて生じた反射によるものである。)

ここで述べられている内容は、Jamesが、Mind誌の論文(James, 1884), The Principles(James, 1890)、および Briefer course(James, 1892)で述べてきた粗大感情の生成メカニズムと完全に符合する。

これに続く段落は、“This idea has a paradoxical sound when first apprehended, and it has not awakened on the whole the confidence of psychologists.”(James, 1894, p. 516; 筆者訳:この考えは、初めて聞かされたときには、逆説的なもの感じられるので、全体的に、心理学者の間で賛同を得ることはできずにいる)という文から始まっており、「泣くから悲しい」(James, 1884,

1890, 1892)のように、彼の学説の中で述べられている、感情現象が身体反応から始発するという考え方が、「悲しいから泣く」という常識的な因果関係の理解とは、まったく逆のことを言っているように思われるので、心理学関係者からの賛同は全体的に得られていないことが述べられている。

これに続く文では、本論の目的が述べられている。“It may interest some readers if I give a sketch of a few of the more recent comments on it.”(James, 1894, p. 516; 筆者訳:この[身体反応から感情体験が生じるという<sup>3)</sup>]学説に関する最新の論評をいくつか取り上げて、簡潔にまとめて述べておくことで、一部の読者に関心を持っていただけるかもしれない。)

つまり、JamesやLangeの感情学説に対する最近の論評、特に批判的な意見をまとめて示そうということのようである。

### 3.2 Wundtによる批判の概要

ここで最初に取り上げられたのが、Wundtからの批判<sup>4)</sup>であった。Jamesはこの批判を取り上げるにあたって、Wundtの批判の対象となるのが、Jamesの感情学説ではなく、もっぱらLangeの学説のみに向けられたものであると述べている。それに続き、Wundtの批判の内容を説明している。“He accuses the latter of being one of those *psychologischen Scheinerklärungen* which assume that science is satisfied when a psychic fact is once for all referred to a physiological ground.”(James, 1894, p. 516; 筆者訳:彼[つまり、Wundt]は、心の問題に関する、見た目だけを考慮した疑似的な説明(*psychologischen Scheinerklärungen*)、すなわち、精神的な事柄をすべて、生理学的基盤によって説明することが、科学の要件であるとする立場であるとして、後者[つまり、Lange]の考え方を非難している。)

このJamesの説明に従えば、Wundtによる批判の焦点となったのは、Langeの感情学説であって、心理的な現象について、脳や神経系などに関連した生理的過程のみに着目して説明しようとする、還元主義的な立場に関連したものであったようだ。

### 3.3 Wundtの感情学説

これに続く段落において、Jamesは、Wundtの感情についての考え方を紹介しながら、これに対するJames自身の意見を表明している。Jamesは、最初に、感情に関するWundtの著作の内容を引用し、Wundtが感

情について、統覚の反応によって直接に生じた結果であるという見方をしていることを述べている。“His own account of the matter is that the immediate and primary result of ‘the reaction of Apperception on any conscious-content’ or object is a *Gefühl* (364).” (James, 1894, p. 516; 筆者訳: 彼[つまり、Wundt]自身がこの問題をどのように説明しているかと言えば、「意識内容」、すなわち対象」に対して生じた統覚の反応」の直接の結果が、感情(*Gefühl*)である。)

ここで述べられている統覚(*Apperception*)とは、意識の統合過程であり、哲学の歴史においては、心的反応、解釈、理解、同化、あるいは、思考などのさまざまな意味で用いられてきた<sup>5)</sup> (James, 1892)。

これに続いて、Jamesは感情(*Gefühl*)について説明している。“*Gefühl* is an unanalyzable and simple process corresponding in the sphere of *Gemüth* to sensation in the sphere of intellection (359).” (James, 1894, pp. 516-517; 筆者訳: 感情(*Gefühl*)は、分析を含まない単純な処理過程であって、心理的体験の領域の中では、観念の中の感覚的な側面に対応するものである。)

このWundtの感情論に対して、Jamesは、次のように述べている。“But *Gefühle* have the power of altering the course of ideas—inhibiting some and attracting others, according to their nature; and these ideas in turn produce both secondary *Gefühle* and organic changes. The organic changes in turn set up additional *sinnliche Gefühle* which fuse with the preceding ones and strengthen the volume of feeling aroused.” (James, 1894, p. 517; 筆者訳: だが、感情(*Gefühle*)には、観念が進む経路を変えてしまう力があって、その観念が持つ性質に応じて、ある種の観念を抑制することがあるし、別な観念を引き寄せることもある。そして、これらの観念は、結果として、二次的な感情(*Gefühle*)と身体的な変化とを生じさせる。これに続いて、身体的な変化は、さらに、感覚に基づく付加的な感情(*Gefühle*)を生起させ、こうした感情が、先に生じていた別な感情と結合して、そのときに生じる感情体験の強度を高める。)

ここではWundtの感情論に関する内容を説明する一方で、ほぼ同時に生じた身体的反応が、感情体験の強度を高めるという考え方について、Wundtの学説にも含まれていることが述べられており、粗大感情に関連したJames自身の感情学説と共通した要素がある点について、明確に主張しているとも言えるだろう。

上述の文章に続けて、感情の概念についてのWundt

の考え方に関して、Jamesは次のように説明している。“This whole complex process is what Wundt calls an *Affect* or *Emotion*—a state of mind which, as he rightly says, ‘has thus the power of intensifying itself’ (358-363). I shall speak later of what may be meant by the primary *Gefühl* thus described.” (James, 1894, p. 517; 筆者訳: このような複雑に構成された過程こそが、Wundtが感情(an *Affect* or *Emotion*)と呼んでいたものであり、このような心の状態には、Wundtが的確に述べているように、「それ自体を増強する力がある。」ここで述べられている一次的感情がどのような意味であるかについては後ほど述べることにする。)

Wundtの感情に関連した3つの用語、すなわち、*Affect*, *Emotion*, および*Gefühl*という用語を取り上げた後に、Jamesは、Wundtの考え方の中で、Jamesの感情学説にも深く関連する部分を指摘する。“Wundt in any case would seem to be certain both that it is the essential part of the emotion, and that currents from the periphery cannot be its organic correlate.” (James, 1894, p. 517; 筆者訳: Wundtは、いかなる場合であっても、次の二つのことを固く信じていたようだ。すなわち、一次的感情(primary *Gefühl*)は、感情(emotion)の本質的な部分であるということと、末梢身体から発した神経興奮は、感情に関連した身体的変化とはなりえないということである。)

そして、Jamesは、Wundtの感情論を次のように批判する。“I should say, granting its existence, that it falls short of the emotion proper, since it involves no *commotion*, and that such currents are its cause. But of these points later on.” (James, 1894, p. 517; 筆者訳: 仮にそのような感情が存在する仮定しても、そのような感情は、心身の顕著な反応を伴うわけではないので、厳密な意味において、感情と呼ぶに足りえないだろうし、末梢からの神経興奮の信号こそが、[感情の]原因となっているのだろう。これらの問題点については、後ほど、あらためて述べる。)

さらに、これ以外のWundtからの批判について、以下のように述べている。“The rest of Wundt's criticism is immaterial, dealing exclusively with certain rash methodological remarks of Lange's; emphasizing the ‘parallelism’ of the psychical and the physical; and pointing out the vanity of seeking in the latter a causal explanation of the former. As if Lange ever pretended to do this in any intimate sense! Two of Wundt's remarks,

however, are more concrete.”(James, 1894, p. 517; 筆者訳: Wundtの批判の中で、それ以外の批判的意見はここで取り上げる価値がなく、もっぱらLangeの著作における方法論的な問題についての記述であり、精神と身体の「平行論」を主張しながら、後者[つまり、身体的過程]によって、前者[つまり、精神的過程]のメカニズムを説明しようとするのが無意味であると指摘した。[実際はそうではないものの、]あたかもLangeが、そのような考えに近い内容を、意図的に述べていたかのような書き方である。他方、[これに続く]Wundtの2つの意見は、もっと具体的な内容である。)

つまり、Wundtからの他の批判の中で、Langeの学説の方法論的な側面のみに向けられていたものについては、具体性に欠けるとともに、James自身の学説に対しては、何ら影響を与えるものではないと考えていたのである。

### 3.4 血管運動性の作用(Wundtによる批判①)

Wundtの具体的な批判として、第一に、Langeが感情が生起するメカニズムを説明する際に、循環器系の反応の中でも、特に、血管運動性の反応だけを重視しすぎており、喜びと怒りのように、感情の正負の性質が全く異なるような感情でさえも同じカテゴリーに入れて考えざるをえなくなる点が指摘されている。この批判について、Jamesは次のように説明している。“How insufficient, he says, must Lange's explanation of emotions from vaso-motor effects be, when it results in making him put joy and anger together in one class!”(James, 1894, p. 517; 筆者訳: 感情が血管運動性の作用によって生じるとしたLangeによる説明は、まことに不十分なところがあり、楽しみと怒りとを同じ感情分類の枠に入れて考えざるをえなくなるのだと[Wundtは]述べている。)

これに続いて、このWundtの批判に対するJamesの考えが述べられている。“To which I reply both that Lange has laid far too great stress on the vaso-motor factor in his explanations, and that he has been materially wrong about congestion of the face being the essential feature in anger, for in the height of that passion almost every one grows pale—a fact which the expression ‘white with rage’ commemorates.”(James, 1894, p. 517; 筆者訳: この批判に対して、私が述べておきたいことは次の2つである。まず、Langeは、感情を説明するにあたって、血管運動性の要因を重要視しすぎていた。次に

で、顔面のうっ血反応が怒りの本質的な特徴であるというLangeの説明は、明らかに間違っており、その理由は、この種の感情が高まったときには、つねに顔色が青白くなるためである。こうした事実は、「怒りで顔が青ざめる」という慣用的な表現とも対応している。)

筆者は、このJamesの意見の中に、彼の感情学説の特徴の一つが、端的に表れているのではないかと考える。その特徴とは、Jamesの感情学説の中で、粗大感情が生成されるメカニズムにおいては、骨格筋などの運動反応などを重視する一方で、末梢の血液循環、もしくは血管運動性の反応はあまり重視していないという点である。Jamesの有名な一節である、“we feel sorry because we cry, angry because we strike, afraid because we tremble”(James, 1884, p. 190; 筆者訳: 声を上げて泣くから悲しいのであり、相手を殴るから怒りを覚えるのであるとともに、体が震えるから恐れを感じるのである)にも、「声を上げて泣く」、「相手を殴る」、「体が震える」といった感情生成の契機となる反応には、血管運動性の反応は含まれておらず、Jamesが当初考えた感情生成のメカニズムの考え方の中では、随意、もしくは不随意的運動反応のほうが重視されていたと考えて良いのではないだろうか。

Langeの学説で、血管運動性の反応が重要視されている点については、Jamesは、*The Principles of Psychology* (James, 1890)の感情の章の中で、Langeによる悲しみの感情が生起するプロセスを説明した文章を引用した後で、Jamesは、Langeの考え方に対して、やや否定的なコメントを述べていた。“My impression is that Dr. Lange simplifies and universalizes the phenomena a little too much in this description, and in particular that he very likely overdoes the anæmiabusiness.”(James, 1890, p. 446; 筆者訳: 私の印象では、この記述の中でLange博士は、これらの現象について、わずかながらも単純化、および普遍化しすぎている点があって、彼はおそらく、貧血状態の問題を誇張しすぎているのだらう。)

この文と、先に引用した*Psychological Review*論文の中の一節である“To which I reply both that Lange has laid far too great stress on the vaso-motor factor in his explanations”を比較してみると、*The Principles*の中では“a little too much”、*Psychological Review*論文の中では“far too great”という表現の違いがあることを見れば、Langeの考え方に対するJamesの態度が多少とも変わっていることは明らかだろう。つまり、拙論(佐藤、

2022a)でも指摘したように、血管運動性の反応を重視するLangeの態度に対して、Psychological Review論文の中では、Jamesが比較的強い表現で批判していると言える。このようにして、Jamesは、Wundtからの感情の生成メカニズムへの批判に対して、Langeを擁護せずに、Langeが重視していた血管運動性の反応の要素だけを強く否定して、その部分だけを生成メカニズムから除外することによって、粗大感情が発生するメカニズムに関するJamesの感情学説の内容を、ほとんど傷つけることなく、ほぼそのまま温存することができたようにも思われる。

### 3. 5 感情の生起には動機づけが必要である (Wundtによる批判②)

これに続いて、Wundtの第二の批判が述べられている。“Secondly, Wundt says, whence comes it that if a certain stimulus be what causes emotional expression by its mere reflex effects, another stimulus almost identical with the first will fail to do so if its *mental* effects are not the same? (355). The mental motivation is the essential thing in the production of the emotion, let the ‘object’ be what it may.” (James, 1894, p. 517; 筆者訳: 第二に、単なる反射の作用だけで、特定の刺激が感情表出を生じさせる場合に、この刺激とほとんど同じ内容の別な刺激があり、この別な刺激の心理的な影響が同じでないならば、その別な刺激が感情表出を生じさせることができないだろうけれども、それはなぜなのかとWundtは述べている。感情が生起する上では、心理的な動機づけが本質的な要素であって、[こうした動機づけによって]その[動機づけの]対象物が、実際に[動機づけの]対象になりうるのである。)

このWundtからの批判の中では、同一の対象物であっても、同じ感情が生じない場合があり、異なる感情が生起したり、もしくは、いかなる感情も生起しないということがありうるという点を指摘している。このような批判に対するJamesの回答の一つが、この段落の最後の文で述べられている。つまり、Jamesの考えによれば、感情が成立する要件として、心理的な動機づけ (the mental motivation) が必要であるという。別な言い方をすれば、われわれの感情は、身体反応だけで成立するわけではなく、心理的な動機づけ、ないし、現代の心理学の用語に置き換えれば、「認知的なラベリング」、つまり、恐怖などの感情の対象として認知するかどうかが必要の要件であるということなのだろう。この考え

方は、後の心理学において提唱された、感情の二要因説、もしくは感情の認知説 (Schachter & Singer, 1962) の内容とも深く関連しているように思われる。Wundtからの批判への対応を通じて、Jamesの感情理論の中で、感情が生起するメカニズムにおける認知的側面の説明について、若干の進展があったと考えて良いのではないだろうか。このWundtからの批判に対して、Jamesは最終的な結論を保留し、これに続けて、類似した批判的意見を取り上げている。

### 3. 6 恐れていなければ恐れの対象にはならない (Ironsによる批判①)

このWundtの第二の批判の説明から始まった議論については、Wundt以外の研究者からも同様の指摘があるとJamesは述べており、他の研究者の指摘についても、この後に続けて紹介している。ここで最初に引用されるのが、Ironsによる批判的意見の内容である。“This objection, in one form or another, recurs in all the published criticisms. “Not the mere object as such is what determines the physical effects,” writes Mr. D. Irons in a recent article which, if it were more popularly written, would be undeniably effective, “but the subjective feeling towards the object ... An emotional class is not something objective; each subject to a great extent classifies in this regard for itself, and even here time and circumstance make alteration and render stability impossible. . . . *If I were not afraid, the object would not be an object of terror*” (p. 84).” (James, 1894, pp. 517-518; 筆者訳: このような批判的な考え方については、内容が多少異なるにせよ、これまで発表されてきた批判的な言説すべてにおいて繰り返し主張されてきた。「そのような単一の対象だけによって身体的な変化が生じるはずがなく、対象物に対する主観的な体験こそが変化を生じさせることができる。(中略)感情を分類するということは、客観的に行えるものではない。[感情を体験する]対象者が、かなりの程度まで、それぞれ体験に基づいて分類するものであり、それでもなお、時と場所の条件によって[感情の分類は]変わりうるものであって、分類が絶えず安定しているということはない。(中略)もし仮に、私が恐れを感情を抱いていないのであれば、対象はもはや恐怖の対象とはならないだろう。」と、Irons氏が最近の論文の中で述べている。仮にこの記述がもっとわかりやすい表現であれば、説得力が、より高いものとなっていたことは疑いないだ

ろう。)

### 3. 7 檻に入ったクマを見ても恐怖は生じない (Worcesterによる批判①)

次いで、JamesはWorcesterの意見を引用している。“And Dr. W. L. Worcester, in an article which is both popularly written and effective, says: “Neither running nor any other of the symptoms of fear which he [W. J.] enumerates is the necessary result of seeing a bear. A chained or caged bear may excite only feelings of curiosity, and a well-armed hunter might experience only pleasurable feelings at meeting one loose in the woods. It is not, then, the perception of the bear that excites the movements of fear. We do not run from the bear unless we suppose him capable of doing us bodily injury. Why should the expectation of being eaten, for instance, set the muscles of our legs in motion? ‘Common-sense’ would be likely to say that it was because we object to being eaten; but according to Professor James the reason we dislike to be eaten is because we run away” (287).” (James, 1894, pp. 518; 筆者訳:「そして、Worcester博士が論文の中で述べている内容は、理解しやすく説得力がある。[クマを見て]走って逃げるとか、その他の恐怖に伴う身体的変化について、彼(William James)は列挙しているけれども、そうした身体活動の変化は、クマを見たことの必然的な結果ではない。鎖でつながれ、檻に入れられたクマは、われわれの好奇心をかき立てるかもしれないし、銃を持った狩猟者であれば、森の中で獲物を見つけたときには喜びの感情が生じるかもしれない。それゆえに、クマを知覚することで、恐怖の運動反応は生じない。われわれの体に危害を加えられるおそれがないのであれば、クマを見ても逃げない。例えば、食べられてしまうという懸念から、われわれの脚の筋肉は動くのはなぜだろうか。「常識」的な考え方からすれば、食べられないために、脚が動くと考えらるだろう。だが、James教授によれば、逃げようと走るために、食べられたくないと思うようになるということである。)

確かに、われわれは動物園で、檻の中にいるクマを見ても、あまり恐怖を感じない。むしろ、好奇心をもって、その様子を観察するかもしれない。たしかに、クマを見るということだけで、恐怖に関連した一定の身体変化が全身に生じることを仮定するのは難しいかもしれない。

### 3. 8 檻に入ったクマが恐ろしくない理由 (連合による状況全体の作用に基づいたJamesの説明)

同じクマでも、鎖でつながれていれば、恐ろしくはない。同じ対象としてのクマを知覚した場合であっても、異なる感情が生じうることはありうる。そのような生起する感情の違いが生じる理由として、Jamesは、連合の働きを想定した説明を行っている。この点について、Jamesは次のように述べている。“A reply to these objections is the easiest thing in the world to make if one only remembers the force of association in psychology.” (James, 1894, pp. 518, 筆者訳:これらの批判的意見に対して反論することは、この世の中で最も簡単な事柄であって、心理学における連合の作用について考えればすむことである。)

この連合、ないしは連想に伴う影響について、Jamesは、次のように説明している。“‘Objects’ are certainly the primitive arousers of instinctive reflex movements. But they take their place, as experience goes on, as elements in total ‘situations,’ the other suggestions of which may prompt to movements of an entirely different sort. As soon as an object has become thus familiar and suggestive, its emotional consequences, *on any theory of emotion*, must start rather from the total situation which it suggests than from its own naked presence. But whatever be our reaction on the situation, in the last resort it is an instinctive reaction on that one of its elements which strikes us for the time being as most vitally important. The same bear may truly enough excite us to either fight or flight, according as he suggests an overpowering ‘idea’ of his killing us, or one of our killing him.” (James, 1894, p. 518; 筆者訳:「対象」は、本能における反射性の運動を引き起こすための基本的な喚起要因であることは疑いない。だが、体験が生じる際には、これらの対象が、「状況」全体に含まれる要素となり、異なる連想を経て、まったく別な種類の運動を生じさせるかもしれない。ひとつの対象が既知となり、何かを連想しやすいものとなるとすぐに、その感情の反応として、いかなる感情理論で想定されるような結果であろうとも、その対象が単独で出現するためではなく、そこから連想される状況全体によって生じるようになる。しかし、その状況において生じた、われわれの反応がどのようなものであれ、急迫した状況において、そのとき生じる反応は、その時点で作用してい

た要素の中で、もっとも重要な意味を持つ要素に対する本能的な反応である。同じクマによって、われわれの側に闘争か逃走かという感情が強く生じるのは、クマに会うことで、クマに殺されるか、あるいはクマを殺すかという観念による強力な作用が及ぶためであるかもしれない。

Jamesによれば、感情の反応は、対象がどのようなものかということのみによって決定されるとは限らず、周囲の状況も含め、対象がいかに認知されるかということによって、そこで生じる感情の反応の内容が決まると述べている。そして、同じクマであっても、異なった認知の内容が生じる背景として、連合の働きを想定しているようだ。このような認知の違いに基づいた説明によって、Jamesは、自分自身の粗大反応の生起メカニズムに関する仮説を擁護した。

そして、Jamesはさらに、感情生起のメカニズムに直接に関連した、次のような問題提起を行っている。“But in either case the question remains: Does the emotional excitement which follows the idea follow it immediately, or secondarily and as a consequence of the ‘diffusive wave’ of impulses aroused?” (James, 1894, p. 518; 筆者訳:だが、いずれにしても解決できない問題が残る。それは、観念に続いて起こる感情興奮は、観念の直後に生じるのか、それとも、二次的なものであって、神経インパルスが波状に拡散する作用の結果として生じるのかという問題である。) Jamesのこれまでの考え方に従えば、言うまでもなく、後者、すなわち、神経インパルスが波状に拡散する作用の結果として、感情興奮が生じるということになるだろう。

Jamesは、感情興奮が観念の直後に生じないと考えていたようだ。この考え方については、James自身がMind誌の論文の中で、次のように述べている。“The hypothesis here to be defended says that this order of sequence is incorrect, that the one mental state is not immediately induced by the other, that the bodily manifestations must first be interposed between, and that the more rational statement is that we feel sorry because we cry, angry because we strike, afraid because we tremble, and not that we cry, strike, or tremble, because we are sorry, angry, or fearful, as the case may be.” (James, 1884, pp. 190, 筆者訳:ここで主張している仮説によれば、この因果関係の順序が逆なのであって、何らかの心的な状態が、別な心的状態から直接に引き起こされることはなく、この両者の間には、身体反

応の表出が介在しているに違いない。そして、より合理的な記述としては、大声を出して泣くから悲しいのであり、相手を殴るから怒りを覚えるのであり、体が震えるから恐れを感じるということになるのであって、悲しみ、怒り、恐れるがゆえに、泣いたり、殴ったり、震えたりするのではない。)

つまり、Jamesは、感情生起における観念の連合、すなわち連想の重要性を述べていた一方で、1884年のMind誌の論文の中で、観念から直接に感情状態が作り出されることがないと明言していた。そのため、このJamesの考え方に基づいて考えれば、“But in either case the question remains: Does the emotional excitement which follows the idea follow it immediately, or secondarily and as a consequence of the ‘diffusive wave’ of impulses aroused?” (James, 1894, p. 518) という問いに対するJamesの答えは、後者である“as a consequence of the ‘diffusive wave’ of impulses aroused” (筆者訳:神経インパルスが波状に拡散した結果) ということになるだろう。この点において、Jamesの考え方は、1884年のMind誌の論文から、1994年のPsychological Review論文にかけて、一貫して変わっていないということが言えるだろう。

### 3. 9 Shylockは金を貸したから怒ったのか? (Worcesterによる批判②)

次いで、Worcesterによる随意筋の運動反応に関連した批判が取り上げられている。この部分において、Jamesは次のように述べている。“Dr. Worcester finds something absurd in the very notion of acts constituting emotion by the consciousness which they arouse. How is it, he says, with voluntary acts?” (James, 1894, p. 518; 筆者訳:運動が意識に興奮性の作用を及ぼすことにより、運動が感情を形作るという考え方に対して、Worcester博士は、納得できない点があった。彼は、随意運動を伴うからといって、どのような変化が起こりうるものなのかという疑念を表明している。)

つまり、随意運動、ないし、随意の行為が、感情と密接に関連しているとは限らないという指摘である。このWorcesterの指摘の具体的な内容が、以下の通り、引用されている。“If I see a shower coming up and run for a shelter, the emotion is evidently of the same kind, though perhaps less in degree, as in the case of the man who runs from the bear. According to Professor James, I am afraid of getting wet because I run. But suppose



that instead of running I step into a shop and buy an umbrella. The emotion is still the same. I am afraid of getting wet. Consequently, so far as I can see, the fear in this case consists in buying the umbrella. Fear of hunger, in like manner, might consist in laying in a store of provisions; fears of poverty in shovelling dirt at a dollar a day, and so on indefinitely. Anger, again, may be associated with many other actions than striking. Shylock's anger at Antonio's insults induced him to lend him money. Did the anger . . . consist in the act of lending the money?" (James, 1894, pp. 518-519; 筆者訳:にわか雨が降り出して、雨を避けようと走るときには、このとき生じる感情は、程度としては小さなものになるだろうけれども、クマを見て走って逃げる人と同様のものとなるのは明らかである。James教授によれば、走るがゆえに、雨に濡れるのを恐れるというのだ。だが、走るかわりに、商店に入って傘を買うとしたらどうだろうか。感情はなお同じものである。濡れることを恐れているのである。こうした考え方に従えば、このときの恐れの本質は、傘を買うということであると考えられる。これと同様に、飢えを恐れることの本質は、食料を十分に蓄えておくことであり、貧困への恐れの本質は、1ドルの日当て土木工事の仕事を請け負うことであり、こうした例をいくらでも挙げることができる。怒りの問題に話を戻すと、殴ること以外のもっと多くの運動が関わっているかもしれない。[Shakespeareの『ヴェニスの商人』の登場人物である]Shylockは、Antonioの無礼な振舞いに対して怒りを覚えて、[Antonioに]金を貸してやった<sup>6)</sup>。怒りの本質とは、(中略)金を貸してやるという行為なのか?)

Jamesの考え方に基づけば、走って雨宿りするだけでなく、傘を買うことによっても、雨に濡れることを恐れる感情が生じることとなり、複数の異なる運動反応のパターンから、同一の感情が生起することを指摘している。また、これと合わせて、『ヴェニスの商人』の登場人物Shylockが、怒りを覚えている相手に金を貸すという行為を行っているものの、この金貸しの行為が怒りを生じさせた決定的な要因になったとは考えにくいと、Worcesterは指摘しているのだろう。

これに対して、Jamesは、若干の自己批判も交えて、以下のように応答している。“I think that all the force of such objections lies in the slapdash brevity of the language used, of which I admit that my own text set a bad example when it said ‘we are frightened because

we run.’ Yet let the word ‘run’ but stand for what it was meant to stand for, namely, for many other movements in us, of which invisible visceral ones seem by far the most essential; discriminate also between the various grades of emotion which we designate by one name, and our theory holds up its head again. ‘Fear’ of getting wet is not the same fear as fear of a bear. It may limit itself to a prevision of the unpleasantness of a wet skin or of spoiled clothes, and this may prompt either to deliberate running or to buying an umbrella with a very minimum of properly emotional excitement being aroused. Whatever the fear may be in such a case it is not constituted by the voluntary act. Only the details of the concrete case can inform us whether it be, as above suggested, a mere ideal vision of unpleasant sensations, or whether it go farther and involve also feelings of reflex organic change. But in either case our theory will cover all the facts.” (James, 1894, p. 519; 筆者訳:こうした批判的意見に説得力があるのは、いずれの場合でも、やたらと短い文章表現を用いているためと思われる。ただし、「逃げるから恐ろしい」などといった、私自身の文章の書き方にしても、その悪い例となっていることを認めざるをえない。だが、「走る」という言葉を、その文脈で使われている意味のとおり、つまり、われわれのさまざまな運動反応を表すものとして用いたとしよう。こうした反応の中では、目に見えない内臓の反応が、もっとも本質的なものであるように思われる。一つの名前で呼んでいる感情にも、さまざまな強弱の違いを区別することができ、ここに至って、われわれの理論がまた息を吹き返すのである。雨で濡れてしまうのではないかという「恐れ」の感情は、クマに遭遇した時の恐れとは同じではない。[雨で濡れることについては]肌や衣服が雨で濡れてしまうという不快な予想をする程度にすぎないかもしれない、そのような状況で生じる反応は、走ろうと考えたり、傘を買ったりといったことであって、感情興奮の程度としてはごく微細なものになるかもしれない。そのような状況での恐れの本質的な要素は、自発的な運動反応ではない。具体的な事例の詳細を検討してわかることは、すでに示されたように、不快な感覚に対する予測に基づいた洞察があるかどうか、あるいは、さらに状況が進んで、反射性の身体反応に関する知覚も生じるかどうかということである。だが、いずれの場合にも、われわれの理論は、すべての事実について、きちんと説明す

ることができるだろう。)

この部分において、粗大感情が生成されるメカニズムに関するJamesの考え方に関連して、特に留意すべきであるのは、第一に、“invisible visceral ones seem by far the most essential” (直接観察できない内臓反応がもっとも本質的な反応であるように思われる) という点であり、第二に、“Whatever the fear may be in such a case it is not constituted by the voluntary act.” (そのような状況での恐れがどのようなものであれ、その本質的な要素は、自発的な運動反応ではない) という点である。クマに襲われそうになって逃げるといような切迫した状況はさておき、少なくとも、雨を避けるために、走って雨宿りするという程度の比較的軽微な感情であれば、感情反応の中で内臓反応が重要な役割を果たし、随意筋の運動反応はさほど大きな役割を果たさないと考え方が述べられている。この考え方は、後述するSollierの症例の知見に基づいたJamesの感情学説の修正内容とも、ほぼ完全に符合している。

### 3. 10 身体反応の多様性と感情体験の強さ (WorcesterとIronsの両者による批判①)

Jamesは、次に、感情における身体反応の多様性の問題を取り上げて議論している。この問題については、WorcesterとIronsの双方から指摘を受けていたようである。Jamesは次のように述べている。“Both Dr. Worcester and Mr. Irons are struck by this variability in the symptoms of any given emotion; and holding the emotion itself to be constant, they consider that such inconstant symptoms cannot be its cause. Dr. Worcester acutely remarks that the actions accompanying all emotions tend to become alike in proportion to their intensity. People weep from excess of joy; pallor and trembling accompany extremes of hope as well as of fear, etc.” (James, 1894, p. 519; 筆者訳: Worcester博士とIrons氏はいずれも、いかなる感情の身体反応にも、このような変動性があるという点に強い関心を持っている。感情を一定に保っていられるならば、そのような一貫性のない身体反応は、感情が生起する原因とはなりえないと彼らは考えている。すべての感情に伴って生じる運動反応は、感情の強さに比例して、ほぼ同様の内容になる傾向があると、Worcester博士は、強く主張している。喜びが感情に高まれば、涙を流すし、恐れのみならず、希望がこの上なく強くなれば、顔面が青ざめて震えるといったことである。)

これらの指摘は、特定の感情体験における身体症状の特徴に一貫性がないといった点や、強い感情が生じたときには、悲しいときだけでなく、うれしいときにも涙を流し、異なる感情の間で同様の反応が生じうるといふ点に着目した、Jamesの感情学説への批判である。これらの点の中で、後者の指摘については、後年になって、Cannon (1927) も“The same visceral changes occur in very different emotional states and in non-emotional states” (Cannon, 1927, p. 109; 筆者訳: 異なった感情状態、さらには感情が生じていない状態であっても、同様の内臓変化が生じうると述べて、JamesとLangeの感情学説の主要な問題点の一つとして取り上げている。この感情体験の内容と身体反応の内容の間の共通性、ないし一貫性が欠けるという問題は、後年のCannonらの批判を待つまでもなく、Jamesが健在で活躍していた時期からすでに、WorcesterやIronsによって強く批判を受けていたということである。

このような批判的意見に対して、Jamesは次のように述べている。“But, I answer, do not the subject's feelings also then tend to become alike, if considered in themselves apart from all their differing intellectual contexts? My theory maintains that they should do so; and such reminiscences of extreme emotion as I possess rather seem to confirm than to invalidate such a view.” (James, 1894, p. 519; 筆者訳: だが、もしも状況の認識が異なることはさておき、対象者の内面を考えた場合、そのようなときであっても、対象者の体験が、似たようなものになりやすいということがないだろうかと、私は反論する。私の理論に照らして考えれば、彼らの体験内容は似たようなものになるはずである。私が経験するような、このように強い感情を想起することで、この[Jamesの]考え方を否定するよりはむしろ、考え方が正しいことを確認できるだろう。)

### 3. 11 身体反応が変化しても感情体験が同じであり続けることは可能なのか?(Lehmannによる批判と「動機のある」感情)

Jamesは、上述のようなWorcesterとIronsらの批判に関連した意見として、Lehmannの指摘を紹介している。Jamesは、次のように述べている。“In Dr. Lehmann's highly praiseworthy book, ‘Die Hauptgesetze des menschlichen Gefühlslebens,’ much is said of Lange's theory; and in particular this same alleged identity of the emotion in the midst of such shifting organic symptoms

seems to strike the critic as a fact irreconcilable with its being true. The emotion ought to be different when the symptoms are different, if the latter *make* the emotion; whereas if we lay a primary mental feeling at its core its constancy with shifting symptoms is no such hard thing to understand (p. 120).” (James, 1894, pp. 519-520; 筆者訳:Lehmann博士が著した本で、賞賛すべきものに、「Die Hauptgesetze des menschlichen Gefühlslebens」(人間の感情生活の主要法則)がある。この中では、Langeの学説について多くのことが述べられている。特に、身体反応が変化している中で、感情が全く同一であるということは、真実とは考えにくいものとして、この批判的な研究者には受け止められたようだ。仮に、後者[つまり、身体反応]が、感情を生み出すのであれば、身体反応が異なるときには、感情も異なるはずである。他方、仮に、一次的な気分をその中核において考えるならば、身体反応が変化する中で、その一貫性が保たれるということは、さほど理解に苦しむものではない。)

Lehmannもやはり、感情体験の内容と身体反応の内容の間の共通性、ないし一貫性が欠けることを問題視しているようだ。

これに対して、Jamesは、次のように述べている。“Some inconstancy in the mental state itself, however, Dr. Lehmann admits to follow from the shifting symptoms; but he contrasts the small degree of this inconstancy in the case of ‘motivated’ emotions where we have a recognized mental cause for our mood, with its great degree where the emotion is ‘unmotivated,’ as when it is produced by intoxicants (alcohol, haschisch, opium) or by cerebral disease, and changes to its opposite with every reversal of the vaso-motor and other organic states. I must say that I cannot regard this argument as fatal to Lange’s and my theory so long as we remain in such real ignorance as to what the subjective variations of our emotions actually are. Exact observation, both introspective and symptomatic, might well show in ‘motivated’ emotions also just the amount of inconstancy that the theory demands.” (James, 1894, p. 520; 筆者訳:だが、精神状態における非一貫性に関しては、Lehmann博士は身体症状の変化に続いて生じる場合があると認めている。だが、彼の比較によれば、われわれの気分を変えた心理的な原因を認識できる[明確な]「動機のある」感情の場合には、この精神状態

における非一貫性の程度は小さいものであり、その一方で、酩酊状態になるような物質(アルコール、ハシッシュ、麻薬)や、大脳疾患によって感情が生じたときのような、[明確な]「動機のない」ものであるときには、血管運動反応や、他の身体変化の状態が、全体的に通常とは反対の方向に変化しており、非一貫性の程度が大きくなると考えられる。ここで指摘しておかねばならないこととして、感情の主観的な変動が、実際のところ、どのようなものであるかについてまったく明確にできていない状況が続くかぎり、この種の批判的な主張によって、Langeと私の学説に致命的な影響を与えられるとは考えにくい。主観的な体験と身体的変化の双方について、正確な観察を行うことで、「動機のある」感情における非一貫性の程度が、この理論の要件を満たす範囲内に収まることが示されるだろう。)

感情の主観的体験と身体的変化が必ずしも一致していることばかりではないという、体験と身体的変化との間の非一貫性に着目した批判に対しては、Jamesによる上述の記載を見る限り、この種の批判的意見を否定できる明確な根拠を、Jamesは示すことができていないように思われる。ただし、感情を「動機のある」感情と「動機のない」感情とに分類し、アルコールを摂取したときなどの「動機のない」感情の場合には、このような非一貫性が高まる一方で、「動機のある」感情においては、非一貫性の程度が小さくなるとJamesは予想しており、この予想が正しければ、少なくとも、「動機のある」感情に限っては、Jamesの感情学説がそのまま有効であり続けると主張しているように思われる。そして、この問題に関する議論に結論を出すための要件として、感情の主観的体験と身体的変化の双方について詳細な観察を行って、両者の関係性を明確にすることが必要であるとの検討課題を示した。そして、この課題についての検証を進めた結果として、われわれが通常経験するような、「動機のある」感情では、主観的体験と身体的変化の非一貫性の大きさが、さほど大きくはないことが明らかになり、JamesやLangeの学説を支持できる程度に収まっていたならば、Jamesの従来の考え方を修正せずに、この批判を乗り切れると考えていたようだ。

ここでLehmannによって提示されていた「動機のある」感情と「動機のない」感情という2つの感情分類に関連して、その後の感情研究においてどのような検討がなされたのかを考えてみると、Cannon(1927)が紹介したMarañonの実験結果が、この問題に深く

関わっていると考えられる。Cannonは、“The James-Lange theory of emotions: A critical examination and an alternative theory” (Cannon, 1927, 筆者訳:James-Lange感情説:批判的検討と、これに代わる新しい理論)と題された論文の中で、JamesとLangeの感情学説に対して5つの点で批判的意見を提示しており、その第5の問題点として、“(5) Artificial induction of the visceral changes typical of strong emotions does not produce them” (Cannon, 1927, p. 113; 筆者訳:強い感情において特徴的に認められる内臓の変化を人為的に引き起こしても感情は生じない)というタイトルを示した後に、次のように述べている。“That adrenin, or the commercial extract of the adrenal glands, ‘adrenalin,’ acts in the body so as to mimic the action of sympathetic nerve impulses has already been mentioned. When injected directly into the blood stream or under the skin it induces dilatation of the bronchioles, constriction of blood vessels, liberation of sugar from the liver, stoppage of gastrointestinal functions, and other changes such as are characteristic of intense emotions. (Cannon, 1927, p. 113; 筆者訳:アドレニン<sup>7)</sup>は、副腎の分泌腺から抽出された「アドレナリン」の市販薬であり、交感神経のインパルスによる作用とよく似た身体的な作用を及ぼすことは、すでに述べた。血流へと直接投与したり、皮下に注射したりしたときには、細気管支の拡張、血管の収縮、肝臓からの糖の放出、胃腸の活動の抑制、ならびに、強い感情に伴って生じるような、他の身体的な変化を生じさせる。)

この記述の中では、アドレナリンの作用に関する説明に続いて、アドレナリンの作用の結果、一定の身体的変化が生じるため、JamesやLangeの考え方に従えば、感情が生起することが予想されるにもかかわらず、実際には、何ら感情が生起しないことを指摘している。その具体的な根拠として、Cannonが大学生を対象に行ったアドレナリン投与後の観察結果と合わせて、Marañonの実験を紹介している。Marañonの実験結果については、次のように述べている。“In a careful study of the effects of adrenalin on a large number of normal and abnormal persons Marañon has reported that the subjective experiences included sensations of precordial or epigastric palpitation, of diffuse arterial throbbing, of oppression in the chest and tightness in the throat, of trembling, of chilliness, of dryness of the mouth, of nervousness, malaise and weakness. Associated with

these sensations there was *in certain cases* an indefinite affective state coldly appreciated, and without real emotion. The subjects remarked, “I feel as if afraid,” “as if awaiting a great joy,” “as if moved,” “as if I were going to weep without knowing why,” “as if I had a great fright yet am calm,” “as if they are about to do something to me.” In other words, as Marañon remarks, a clear distinction is drawn “between the perception of the peripheral phenomena of vegetative emotion (i.e. the bodily changes) and the psychical emotion proper, which does not exist and which permits the subjects to report on the vegetative syndrome with serenity, without true feeling.”” (Cannon, 1927, p. 113; 筆者訳:多くの健常な被験者、および何らかの障害を抱えた被験者を対象として、アドレナリンの効果について詳細に調べた研究について、Marañonが報告しており、被験者の主観的な体験には、胸部または上腹部の動悸、広範囲の動脈の脈動感、胸部の圧迫感と、のどの息苦しさ、体の震えと寒気、喉の渇きを感じたり、緊張感、不快感、および、脱力感を覚えたりした体験が含まれていた。こうした感覚に関連して、実際の感情を経験することなく、漠然として不明瞭な興奮状態を経験した事例があった。この事例の被験者は、「自分が、あたかも何かを恐れているかのように感じている」、「何かともうれいことが起こりそうだ期待しているかのような」、「何かに感動したかのような」、「理由はわからないけれども涙を流しそうだった」、「強い恐怖を感じているかのようなだったが、今は落ち着いている」、「あの人たちが私に何かしてくれそうだと感じる」と述べていた。別な言い方をすれば、Marañonが述べているように、内臓活動による感情(すなわち身体的変化)の知覚と、感情の主観的体験との間で明確な違いがあり、このときには、感情の体験が生じておらず、実際の感情体験を伴わない、平静な状態での内臓反応として被験者が報告している。)

本論の3.14にて後述するように、Cannonは、この論文を執筆するにあたり、JamesのこのPsychological Review論文の内容を詳細に把握していたのではないかと思われる。Jamesは、Lehmannの指摘に対して、上述のとおり、次のように述べていた。“Some inconstancy in the mental state itself, however, Dr. Lehmann admits to follow from the shifting symptoms; but he contrasts the small degree of this inconstancy in the case of ‘motived’ emotions where we have a recognized mental

cause for our mood, with its great degree where the emotion is 'unmotivated,' as when it is produced by intoxicants (alcohol, haschisch, opium) or by cerebral disease, and changes to its opposite with every reversal of the vaso-motor and other organic states. I must say that I cannot regard this argument as fatal to Lange's and my theory so long as we remain in such real ignorance as to what the subjective variations of our emotions actually are." (James, 1894, p. 520; 筆者訳:だが、精神状態における非一貫性に関しては、Lehmann博士は身体症状の変化に続いて生じる場合があると認めている。だが、彼の比較によれば、われわれの気分を変えた心理的原因を認識できる[明確な]「動機のある」感情の場合には、この精神状態における非一貫性の程度は小さいものであり、その一方で、酩酊状態になるような物質(アルコール、ハシーシュ、麻薬)や、大脳疾患によって感情が生じたときのような、[明確な]「動機のない」ものであるときには、血管運動反応や、他の身体変化の状態が、全体的に通常とは反対の方向に変化しており、非一貫性の程度が大きくなると考えられる。ここで指摘しておかねばならないこととして、感情の主観的な変動が、実際のところ、どのようなものであるかについてまったく明確にできていない状況が続くかぎり、この種の批判的な主張によって、Lange と私の学説に致命的な影響を与えられるとは考えにくい。)

Cannonは、先に述べたJamesからLehmannへの反論を念頭に置きながら、アルコールや脳の疾患などと異なり、強い感情体験が生じたときと、ほぼ同様の身体的反応を生じさせたアドレナリン投与の実験結果を提示することによって、Jamesの反論の余地をなくすように試みたのではないだろうか。

Cannon(1927)によるJamesの学説への批判は、James没後に発表されたものであり、このCannonの批判に対して、仮に、Jamesが存命であれば、どのように応答したかということに関しては、Jamesの著作の内容などをもとに推測するしかないものの、Cannonからの批判は、Jamesにとっては、かなり反論しがたいものであったかもしれない。その一方で、仮に、「動機のある」感情だけに議論を限定し、身体反応の知覚とともに、James自身の議論の中で、感情が生起したときの「動機」、もしくは、現代心理学の表現に従えば、認知的なラベリングについても、感情生起の要件として扱っていたとすれば、本論3.5のWundtからの批判への回答内容とも関連して、後年にSchachterとSinger(1962)が提唱した

「感情の二要因説」に大きく近づいた学説へと進展することができた可能性もあるのではないだろうか。

### 3. 12 身体反応の個人差(Ironsによる批判②)

感情の主観的体験と身体的変化との間の非一貫性の問題についての議論は、さらに進み、個人差の問題に着目した批判的意見が取り上げられる。Jamesは次のように述べている。“Mr. Irons actually accuses me of self-contradiction in admitting that the symptoms of the same emotion vary from one man to another, and yet that the emotion has them for its cause. How can any definite emotion, he asks, exist under such circumstances, and what is there then left to give unity to such concepts as anger or fear at all (82) ?” (James, 1894, p. 520; 筆者訳:同じ感情の身体反応が、人によって異なるにもかかわらず、感情が生じる原因は身体反応である点に自己矛盾があるとして、Irons氏は私を非難している。そのような状況下で、明確に区別できる典型的な感情が、どのようにして生起しうるのか、そして、怒りや恐れといった[感情カテゴリーの]概念を、一つにまとめることができるようなものとは何なのかといった点を、彼は疑問点として提示している。)

身体反応の個人差があるにもかかわらず、別々な身体反応からであっても、同一の感情が生起すると考える場合には、論理的に一貫性がなく、そのような仮説が正しいとは考えにくいという指摘である。仮に、身体反応が感情を生起させる原因であるならば、異なった身体反応から、なぜ怒り、あるいは恐れといった同一の種類の感情が生起するのか、また、生起した感情を同一のものとして考える根拠はどこにあるかという疑問を提示したようである。

この疑念に対して、Jamesは次のように答えている。“The natural reply is that the bodily variations are within limits, and that the symptoms of the angers and of the fears of different men still preserve enough *functional* resemblance, to say the very least, in the midst of their diversity to lead us to call them by identical names. Surely there *is* no definite affection of 'anger' in an 'entitative' sense.” (James, 1894, p. 520; 筆者訳:この疑問に対する回答として、当然のことながら、身体反応の変化の大きさについては範囲が限られており、怒りや恐れ的身體反応に関して、少なくとも機能的な側面に限って言えば、個人の間で類似性が十分に保たれ

ており、個人間の多様性があるにせよ、こうした感情を同一の名称で呼ぶことが可能である。[怒りの反応の]「全体」から考えれば、[このような状態こそが怒りの感情だという]明確に区別できる典型像が、「怒り」の感情には存在しないことは間違いない。

Jamesは、怒りの感情の典型となるような状態像があるとは考えておらず、怒りの状態像は個人の間で異なりうるものであり、同一個人であっても、時と場合によって異なる反応になりうると考えていたようだ。ただし、身体反応の変化の大きさに関しては、その変動の幅、ないし範囲に一定の制限があることを指摘することによって、身体反応の知覚によって粗大感情が生成されるという因果関係のモデルを正当化しようと考えていたのではないかとも思われる。

### 3. 13 身体反応の知覚だけ特別扱いしているのか？(Ironsによる指摘③)

主観的体験と身体的変化との非一貫性についての議論に続いて、認知と感情の2つの心的な状態が、同様の神経過程で生じるかどうかについて議論している。“Mr. Irons finds great difficulty in believing that both intellectual and emotional states of mind, both the cognition of an object and the emotion which it causes, contrasted as they are, can be due to such similar neural processes, viz., currents from the periphery, as my theory assumes. “How,” he asks, “can one perceptive process of itself suffuse with emotional warmth the cold intellectuality of another? . . . If perceptions can have this warmth, why is it the exclusive property of perception of organic disturbance (85.) ? ”” (James, 1894, p. 520; 筆者訳:Irons氏にとっては、心の状態の中でも、知的な状態と感情的な状態の双方、別な言い方をすれば、対象の認知と、そこで生じた感情の認知の双方について、これらを比較して考えたときに、私の理論で仮定しているように、同様の神経過程、すなわち、末梢からの神経信号によって生じるものであるなどは、まったく考えにくいようだ。「何らかの知覚作用自体が、別な知覚作用における、感情を含めない客観的な知的活動に対して、感情的な温かみで満たすようなことなど、どのようにすればできるのだろうか。(中略)知覚に温かみを加えることができるとして、なぜ身体的な反応に関する知覚だけは、他にはない特徴を持つのか」という疑念を彼は述べている。)

Jamesの感情学説では、内臓などからの神経信号に

基づいて身体の反応を知覚することで、粗大感情が成立すると考えられており、Ironsとしては、視覚、聴覚、嗅覚などの外受容感覚では生じなかった作用が、内臓感覚などの内受容感覚においてのみ特別に生じると考えるのは合理的ではなく、内受容感覚だけを特別扱いするのはおかしいという批判なのだろう。

Jamesは、このIronsの批判に対して、最初に、次のように答えている。“I reply in the first place that it is not such exclusive property, for all the higher senses have warmth when ‘aesthetic’ objects excite them. And I reply in the second place that even if secondarily aroused visceral thrills were the only objects that had warmth, I should see no difficulty in accepting the fact.” (James, 1894, p. 520; 筆者訳:これに対して、私は最初に、これは独自の特徴ではないことを申し上げる。このように考える理由は、「美的な」対象によって刺激を受けた際には、すべての高次の感覚には[感情の]温かみが生じるためである。第二に、二次的に生じた内臓の変化だけが、温かみのある対象である場合でさえ、このことが事実であると認めることに矛盾を感じない。)

James自身は、感情成立において、内臓感覚だけに特別な感情的性質が付与されるように限定されているわけではないと述べている。

Ironsに対する反論に続いて、さらに、Ironsの感情に関連した考え方について、次のように説明している。“This writer further lays great stress on the vital difference between the receptive and the reactive states of the mind, and considers that the theory under discussion takes away all ground for the distinction. His account of the inner contrast in question is excellent. He gives the name of ‘feeling-attitude’ to the whole class of reactions of the self, of which the experiences which we call emotions are one species.” (James, 1894, pp. 520-521; 筆者訳:この著者[つまり、Irons]は、受容的および反応的な心の状態の間で重要な違いがあることを強く主張しており、今ここで議論している理論に従えば、このような区別を行う余地がなくなってしまうと考えている。こうした内面の性質に関する比較についての彼の説明は、優れたものである。彼は、自己のさまざまな反応に含まれるもの全体に対して、「体験的態度」(feeling-attitude)という名称を与えている。この自己の反応を体験することを、われわれが感情と呼んでおり、こうした体験が、独立した一種[の感情]となっている。)

Jamesは、これに続いて、この体験的態度という心理的な体験の質、ないし内容を区分する概念に賛同しながら、Ironsの体験的態度に関する説明を述べている。“He sharply distinguishes feeling-attitude from mere pleasure and pain—a distinction in which I fully agree. The line of direction in feeling-attitude is from the self outward, he says, while that of mere pleasure and pain (and of perception and ideation) is from the object to the self. It is impossible to feel pleasure or pain towards an object; and common language makes a sharp distinction between being pained and having bad feelings towards somebody in consequence. These attitudes of feeling are almost indefinitely numerous; some of them must always intervene between cognition and action, and when in them we feel our whole Being moved (93-96).” (James, 1894, p. 521; 筆者訳:彼[Irons]は、この体験的態度を、快楽と苦痛から明確に区別しており、このように区別することに関しては、私は大いに賛成である。体験的態度が向かう方向性は、自己から外に向かうと彼は述べている。その一方で、快楽や苦痛(および知覚や思考)の向かう方向性としては、対象から自己へと向かうのだと述べている。快楽や苦痛を対象の方向に向けて体験することは不可能である。痛みを覚えることと、その結果として他の誰かに向かって悪い感情を抱くこととは、[われわれがコミュニケーションのために平素用いている]共通の言語体系において、明確に区別される。これらの感情への態度には、ほとんど限りなく多岐に多くの種類がある。認知と行動との中間にいつも介在している態度もあり、こうした態度の中では、われわれの存在全体が揺り動かされていると感じる。)

Ironsが考えた概念である体験的態度について説明した後、Jamesの学説に対して、どのような批判が行われたかが説明されるとともに、このような批判には根拠がないことを指摘している。“Of course one must admit that any account of the physiology of emotion that should be inconsistent with the possibility of this strong contrast within consciousness would thereby stand condemned. But on what ground have we the right to affirm that visceral and muscular sensibility cannot give the direction from the self outwards, if the higher senses (taken broadly, with their ideational sequelæ) give the direction from the object to the self? We do, it is true, but follow a natural analogy when we say (as Fouillée keeps saying in his works on *Idées-forces*, and

as Ladd would seem to imply in his recent *Psychology*) that the former direction in consciousness ought to be mediated by outgoing nerve-currents, and the latter by currents passing in. But is not this analogy a mere superficial fancy, which reflection shows to have no basis in any existing knowledge of what such currents can or cannot bring to pass? We surely know too little of the psycho-physic relation to warrant us in insisting that the similarity of direction of two physical currents makes it impossible that they should bring a certain inner contrast about.” (James, 1894, p. 521; 筆者訳:もちろん、感情が生起することを生理学的に説明しようとすれば、どのような説明の仕方であろうと、意識の中で、このように大きく異なる内容を体験する可能性との対応関係を示すことができず、そのために批判を受けてしまうことを考慮に入れる必要があるだろう。だが、(感覚に続いて生じる観念も含めた広義での)高次の感覚において、方向が対象から自己に向かう場合に、内臓と筋肉の感覚能力に対して、方向性を自己から外部に向けることができないなどという考えを受け入れなくてはならない根拠は何なのだろうか。確かに、われわれは、自然で、もっともらしい類推に従ってしまい、意識における前者の方向性[つまり、自己から外に向かう方向性]は、神経の興奮の放出によって媒介されているにちがいないし、後者[つまり、対象からの自己への方向性]については、内部へと向かう神経興奮によって媒介されるはずだと考える(これと同様のことを、Fouilléeが*Idées-forces*[行動に結びついた理念]に関する著作の中で、何回も主張していたとともに、Laddの近著“*Psychology*”の中で、明言はしていなかったものの、同様のことを示唆する表現があったように思われる)。だが、このような類推は、思慮が浅く、中身のない考えにすぎないのではないだろうか。この考え方について詳しく考察したならば、そのような神経興奮によって、どのようなことが生じうるのか、あるいは、生じえないのかといった点について、これを裏付ける既存の知識がないことが明らかになる。精神現象と物理現象との関係性についてほとんど明らかにできておらず、2つの身体的な信号の方向性が類似していることを理由に、こうした信号によって、内面[の意識体験]に違いが生じることは起こりえないなどといった主張が正しいと考えることはできない。)

このIronsによる批判の中では、対象に向かうか、自己に向かうかという、体験的態度に関連した体験の向

かう方向性と、求心性、または遠心性、あるいは、上行性、または下行性といった神経興奮の向かう方向性との間に、明確な対応関係があることが前提となっていることを指摘し、精神活動と身体活動との間で、活動の向かう方向性に明確な対応関係があるという知見は当時の時点で明らかにされていなかったことが述べられている。つまり、このIronsの批判に関しては、この主張を正当化する根拠がないことを指摘して、JamesやLangeの感情学説を否定することができないと結論づけている。

このことに関連して、当時の心理学者たちの心身の相互関係についての考え方には、研究者たちの間で、かなりの程度の相違があったことが、この議論における主要な論点に深く関わっていたのかもしれない。Jamesの感情学説は、身体活動が、感情という一種の精神活動の決定因となることを主張しており、その意味において、少なくとも、物理(身体)から心理(精神)への因果的な影響関係を想定していた。その一方で、ここでのJamesの主張内容を見る限り、Jamesは、機能的な面で一定の相関関係を認めながらも、身体活動と精神活動との間には、意識体験の過程と、神経活動の過程との間で、それぞれの内容における構造上の類似性が保証されるものではないと考えていたようだ。

### 3. 14 身体反応を知覚すること自体は感情ではない(WorcesterとIronsの両者による批判②)

体験内容と身体反応の内容との間の非一貫性の議論を終えた後、身体反応の知覚自体は感情ではないという批判的意見を取り上げて議論している。“Both Dr. Worcester and Mr. Irons insist on the fact that consciousness of bodily disturbance, taken by itself, and apart from its combination with the consciousness of an exciting object, is not emotional at all. “Laughing and sobbing, for instance,” writes the former, “are spasmodic movements of the muscles of respiration, not strikingly different from hiccoughing; and there seems no good reason why the consciousness of the former two should usually be felt as strong emotional excitement while the latter is not. . . . Shivering from cold, for instance, is the same sort of a movement as may occur in violent fright but it does not make us feel frightened. The laughter excited in children and sensitive persons by tickling of the skin is not necessarily accompanied

by any mirthful feelings. The act of vomiting may be the accompaniment of the most extreme disgust, or it may occur without a trace of such emotion ” (289).” (James, 1894, pp. 521-522; 筆者訳: Worcester博士とIrons氏はどちらも、身体変化についての意識に関して、これだけを単独で取り上げて、興奮を生じさせた対象の意識との組み合わせとは別にして考えれば、感情のようなものではまったくないということを主張している。「例えば、笑ったり、泣いたりすることは、呼吸筋の断続的な運動であって、しゃっくりと大きく異なるわけではない。前者の2つ[つまり、笑うことと泣くこと]を意識することが、強い感情興奮として感じられることが多い一方で、後者[しゃっくり]については、そのように感じられることはなく、この点について、十分な理由が見当たらないようだ。(中略)例えば、寒さで震えているとき、強い恐れのとときに起こる運動と同種ではあるものの、寒さによる震えによって、われわれが恐れを感じることはない。子どもや感受性の高い人が、肌をくすぐられて笑ったとしても、必ずしも愉快的な感情を伴うわけではない。嘔吐には、強い嫌悪が付随して起こるかもしれない一方で、そうした感情の兆しが認められないところでも、嘔吐が生じるかもしれない。」と、一人目の研究者[Worcester博士]は述べている。)

WorcesterとIronsの意見に対して、Jamesは、次のように答えている。“The facts must be admitted; but in none of these cases where an organic change gives rise to a mere local bodily perception is the reproduction of an emotional diffusive wave complete. Visceral factors, hard to localize, are left out; and these seem to be the most essential ones of all. I have said that where they also from any inward cause are added, we *have* the emotion; and that then the subject is seized with objectless or pathological dread, grief, or rage, as the case may be. Mr. Irons refuses to accept this interpretation. The bodily symptoms do not here, he says, when felt, constitute the emotion. In the case of fear they constitute rather the object of which we are afraid. We fear *them*, on account of their unknown or indefinite evil consequences. In the case of morbid rage, he suggests, the movements are probably not the expression of a genuine inner rage, but only frantic attempts to relieve some inward pain, which outwardly look like rage to the observer (80). These interpretations are ingenious, and may be left to the reader's judgment.



I confess that they fail to convert me from my own hypothesis.” (James, 1894, p. 522; 筆者訳:これらのことは事実として認めなければならない。だが、身体変化によって局所的な身体知覚のみを生じさせるような、これらの事例において、感情の拡散的な波が十分なものになることはない。内臓の因子は、局所的に生じるものではなく、脱落してしまっている。これらの要因は、身体変化全体の中で、もっとも本質的な要因であるように思われる。何らかの身体的な原因により、内臓要因が付加されるとき、われわれは感情を体験すると、筆者[James]はすでに述べていた。場合によっては、その当事者が、対象のない病的な恐怖、悲しみ、怒りを感じることもある。Irons氏はこのような解釈を受け入れなかった。身体症状を感じたとしても、感情の構成要素とはなりえないと彼は述べている。恐れの場合には、身体反応は、われわれが恐れる対象の側の構成要素となる。こうした対象を恐れるのは、未知の、あるいは深刻な不運の結果によるものである。病的な怒りの場合には、運動は、純粋に内面から発した怒りの表出ではなく、内面的な苦痛を和らげるための必死の試みにすぎず、このような行為は、観察者にとっては怒りに見えると彼[Irons]は述べている。こうした解釈は、独創的であり、読者の評価にゆだねて良いかもしれない。彼らの批判を受けても、私自身の持つ仮説について、考えを変えようとは思っていないことを申し上げたい。)

感情の反応が、波状の拡散作用によって、広範囲で生起する必要がある、局所的な身体変化だけでは、感情を成立させることができないと、Jamesは主張した。そして、身体反応の広範性を感情成立の条件とすることによって、局所的な身体反応を取り上げた批判に対して、Jamesは自らの感情学説を擁護しようと試みている。

この点については、後年になって、Cannon(1927)がJamesの感情学説を批判する際に挙げた5つの問題点の中の第二の指摘に関連している。Cannonは、この1927年の論文をまとめるにあたって、おそらく、JamesのPsychological Review論文の内容、特に、Jamesがこの種の批判に対して反論した内容の弱点を踏まえ、Jamesに対する批判の内容を、より一層強力なものにしたと考えられる。筆者がそのように考える理由は、Cannonが“(2) The same visceral changes occur in very different emotional states and in non-emotional states.” (Cannon, 1927, p. 109; 筆者訳:全く異なる感情状態や、感情とは異なる状態であっても同様の内臓変化が

生じる)という表題に続けて、次のように指摘している点にある。“The preganglionic fibers of the sympathetic division of the autonomic system are so related to the outlying neurones that the resulting innervation of smooth muscles and glands throughout the body is not particular but diffuse. At the same time with the diffuse emission of sympathetic impulses adrenin is poured into the blood. Since it is thereby generally distributed to all parts and has the same effects as the sympathetic impulses wherever it acts, the humoral and the neural agents cooperate in producing diffuse effects. In consequence of these arrangements the sympathetic system goes into action as a unit—there may be minor variations as, for example, the presence or absence of sweating, but in the main features integration is characteristic.” (Cannon, 1927, p. 109; 筆者訳:自律神経系における交感神経の節前線維は、体幹部から離れた位置にあるニューロンと深く結びついており、全身の平滑筋や分泌腺の神経支配は、局所に限定されず、全身に拡散的に広がった作用を示す。交感神経のインパルスが全身に広がると同時に、アドレニン[これはアドレナリン、ないしエピネフリンの別名]が血液中に分泌される。そのため、[アドレニン]は全身のさまざまな部位へと広範囲に広がり、交感神経のインパルスが全身に作用するのと同様の効果があるので、体液性と神経性の作用因子は全身性の作用を協働して作り出す。これらの協調的な作用の結果、交感神経系の作用は一体的なものとなる。例えば、発汗があったとか、なかったとか、微細な差異はあるかもしれないけれども、ここでもっとも目立つのは、全体の統合的な作用が特徴となっている点である。)

Cannonが、「全く異なる感情状態や、感情とは異なる状態であっても同様の内臓変化が生じる」という点について論じるにあたり、彼の論文の当該セクションの冒頭において、上述のように、交感神経性の作用の統合性を最初に説明していたのは、先のPsychological Review論文におけるJamesの主張を踏まえた結果ではなかろうかと筆者は推測している。つまり、上述のように、Jamesが、自らの感情学説を擁護するために、身体反応が広範囲に生じることを感情成立の要件としていた点に着目し、このJamesが指摘した内容に対する反証として、複数の別な感情の間で、あるいは、感情とは異なる状態においても、特定の感情と同様の身体反応が全身的に生じる場合があることを主張したのではな

いだろうか。仮に、Cannonが指摘するように、例えば、怒りや恐怖といった個々の感情における全身性の反応には、かなりの類似性があるのだとすれば、反応が全身に及ぶという特徴だけでは、Jamesが感情成立の要件として提示していたにもかかわらず、個々の感情の成立過程を十分に説明できないことになる。

### 3. 15 感情体験をめぐる問題と「体験の質」 (IronsとWundtなどの研究者による批判)

身体反応の知覚に関連した議論が続いては、哲学的な観点からの主観的体験に関する批判的意見が取り上げられている。“Messrs. Irons and Wundt (and possibly Baldwin and Sully, neither of whom accept the theory in dispute, but to whose works I have not access where I write, so that I cannot verify my impression) think that the theory carries with it implications of an objectionable sort philosophically. Irons, for example, says that it belongs to a psychology in which feeling can have no place, because it ignores the self and its unity, etc. (92).” (James, 1894, p. 522; 筆者訳:IronsとWundtの両氏は、この理論には、哲学的な観点から見て望ましくない部分があると思っている(BaldwinとSullyも、ここで議論している学説を受け入れようとせず、本論の執筆中には、彼らの著作の内容を確認できなかったために、私の印象が正しいかどうかをきちんと確認できないもの、おそらく彼らも同様の批判的意見を持っていると考えて良いだろうと思われる)。例えば、この理論は、体験の内容を扱わない心理学の理論であり、その理由は、自己とその一体性などを考慮に入れていないためであると、Ironsは述べている。)

筆者の考えでも、確かに、Jamesの感情理論は、脳の中に感情の座があるかどうかといった脳内メカニズムの議論や、粗大感情や繊細感情が生成される生理的ないし神経学的なメカニズムに重点を置いた学説であって、体験の内容を深く掘り下げようという試みは、あまり行われていないように思われる。そもそも生理学的、ないし神経学的な感情理論であるのだから、主観的体験の問題の扱いが不十分になるのは致し方ないのではないかとも思う。

他方、心理学の歴史を考えてみると、このJamesの感情学説が発表され、他の研究者から批判を受けていた時期は、19世紀後半であり、当時の心理学では、内観主義心理学や連合主義心理学が優勢であり、主観的な体験の内容に関する内観や、体験内容にお

る観念の連合などに強い関心を持つ研究者が少なくなかったのかもしれない。こうした批判に対して、Jamesは、次のように答えている。“In my own mind the theory has no philosophic implications whatever of a general sort. It assumes (what probably every one assumes) that there must be a process of some sort in the nerve-centres for emotion, and it simply defines that process to consist of afferent currents. It does this on no general theoretic grounds, but because of the introspective appearances exclusively.” (James, 1894, pp. 522-523; 筆者訳:私の考えでは、この理論について、哲学全体を含めて考えても、哲学とは何ら関わりがあるわけではないと思う。この理論では、(おそらく、すべての人が考えることだと思われるけれども)感情の神経中枢における何らかの作用が存在するはずであると考えており、この神経作用が、求心性神経の興奮によって構成されていることを明確に示している。このような説明は、理論的な根拠に基づいておらず、これはもっぱら内観の内容のみに基づくものである。)

Jamesは、彼の感情学説が、哲学における主観的体験の問題とは直接関わっていないことを明言しており、主観的体験に関する哲学的な議論に基づいて、彼の理論を批判することには意味がないと主張しているように思われる。

これに続いて、Jamesは、主観的体験の中でも、特に感情の体験に関連した問題として、快や不快の問題を取り上げて、当時の心理学における一般的な考え方を述べている。“The objective qualities with which perception acquaints us are considered by psychologists to be results of sensation. When these qualities affect us with pleasure or displeasure, we say that the sensations have a ‘tone of feeling.’ Whether this tone be due to a mere form of the process in the nerve of sense, as some authors (e.g. Mr. Marshall) think, or to additional specific nerves, as others (e.g. Dr. Nichols) opine, is immaterial. The pleasantness or unpleasantness, once there, seems immediately to inhere in the sensible quality itself. They are beaten up together in our consciousness.” (James, 1894, p. 523; 筆者訳:知覚によって得られる客観的な性質は、感覚の結果生じるものであると、心理学者たちは考えてきた。こうした性質に関して、快や不快を含む作用を及ぼすとき、そのときの感覚には、「体験の質」が加わると言われている。この体験の質は、感覚神経における作用によって生じ

ると考える研究者(例えば、Marshall氏)がいるし、これとは別な、特殊な神経によって生じると述べる研究者(Nichols博士)もいるが、これらのどちらが正しいかということは、さして重要な問題ではない。快と不快が、いったん生じたならば、感覚可能な性質の中に即座に表れるように思われる。快や不快は、意識の中で集まり、同時に表現される。)

この知覚の客観的性質や体験の質に関連して、Jamesは次のような主張を行っている。“But in addition to this pleasantness or painfulness of the content, *which in any case seems due to afferent currents*, we may also feel a general seizure of excitement, which Wundt, Lehmann, and other German writers call an *Affect*, and which is what I have all along meant by an emotion. Now whenever I myself have sought to discover the mind-stuff of which such seizures consist, it has always seemed to me to be additional sensations often hard to describe, but usually easy to identify, and localized in divers portions of my organism. In addition to these sensations I can discern nothing but the ‘objective content’ (taking this broadly so as to include judgments as well as elements judged), together with whatever agreeableness or disagreeableness the content may come tinged by. *Such organic sensations being also presumably due to incoming currents, the result is that the whole of my consciousness (whatever its inner contrasts be) seems to me to be outwardly mediated by these.* This is the length and breadth of my ‘theory’—which, as I apprehend it, is a very unpretending thing.” (James, 1894, pp. 523-524; 筆者訳:だが、体験の内容に含まれる快と苦痛については、いかなる場合であっても、求心性の神経興奮に基づいて生起するよう思われる。それに加えて、全身的な興奮が高まることを体験するかもしれない。このような興奮の高まりについては、Wundt、Lehmann、およびドイツの研究者がAffectと呼ぶものであり、私が当初からずっと感情という言葉で表現してきたものである。こうした興奮を成立させるような心の構成要素を見出そうとしてきたものの、そのようなときはいつでも、付加的な感覚であるように思われる。この感覚は言葉で説明しづらいことが多いながらも、この内容を同定しやすいことが多く、私の体の中の奥深い部分にあるようだ。こうした感覚に加えて、内容に付加された快と不快がどのようなものであったにせよ、(要素だけでなく、判断も含むように、広い意味を

持つものとして)「客観的な内容」だけは、きちんと見定めることができる。このように身体に備わった感覚が、入力された神経興奮によって生じると考えられるために、(どのような内面の違いがあるにせよ)私の意識の全体は、これらの感覚が介在することによって外部へとつながっているように思われる。これこそが、私の提唱した「理論」の全体であり、私の理解では、ここで述べたことが、ありのままの姿である。)

Jamesによる、この説明は、当時のドイツで優勢であった心理学、すなわち内観主義心理学の枠組みを考慮に入れて、彼の感情学説の内容の中でも、特に、主観的体験の側面に焦点を当てながら、詳細な説明を行ったとも考えられるのではないだろうか。別な言い方をすれば、Wundtらが依拠する内観主義の枠組みを否定するのではなく、その枠組みの中で、可能な限り説得力を高めながら、自らの考え方の内容を説明しようと試みたのではないかと筆者には思われる。

### 3. 16 感情の階層的性質と心身の相互関係の問題(批判的意見についての総括①)

主観的体験に関する議論に続いて、Jamesは、彼の感情理論と、これに対する批判的な意見との間で、両者の考え方が、ある程度まで一致した部分があり、互いに同意できる妥協点があることを述べている。“It may be, after all, that the difference between the theory and the views of its critics is insignificant. Wundt admits tertiary feelings, due to organic disturbance, which must fuse with the primary and secondary feelings before we can have an ‘Affect;’ Lehmann writes: “Constrained by the facts, we are obliged to concede to the organic sensations and tones of feeling connected with them an essential participation in emotion (*wesentliche Bedeutung für die Affecte*)” (p. 115); and Professor Ladd also admits that the ‘rank’ quality of the emotions comes from the organic repercussions which they involve. So far, then, we are all agreed; and it may be admitted, in Dr. Worcester’s words, that the theory under attack ‘contains an important truth,’ and even that its authors have ‘rendered a real service to psychology’ (p. 295).” (James, 1894, p. 524; 筆者訳:結局のところ、この[Jamesたちの]理論と、これを批判する研究者の意見との違いは、あまり重要ではないのかもしれない。Wundtは、身体的な反応によって生じた、三次的な体験の存在を認めており、このときの身体的反応は、

Affect(感情)を体験する前の時点で、一次的、および二次的な体験に融合するであろう。そして、「事実関係を考えれば、感情の本質的要素として、身体的な感覚と、この種の感覚に密接に関連した体験の質を考えるべきである」と、Lehmannは述べている。さらに、感情の「階層的」性質が、感情に伴う身体活動の影響に由来するという考え方について、Ladd教授が、正しいと認めている。このように、現在の時点では、われわれすべての研究者の間で、合意が形成されている。Worcester博士の言葉を借りれば、この理論には、批判を受けながらも「重要な真実を含んで」おり、この著者たち[つまり、JamesとLange]は「心理学に重要な貢献をした」とも認められるかもしれない。

上述のように、感情の階層構造について、ある程度の合意ができていながらもかかわらず、なぜこれほどの批判を受けねばならないのかと、Jamesが、次のように訴えている。“Why, then, is there such strong opposition? When the critics say that the theory still contradicts their consciousness (Worcester, p. 288), do they mean that introspection acquaints them with a part of the emotional excitement which it is psycho-physically impossible that incoming currents should cause? Or, do they merely mean that the part which introspection can *localize* in the body is so small that when abstracted a large mass of unlocalizable emotion remains? Although Mr. Irons professes the former of these two meanings, the only prudent one to stand by is surely the latter; and here, of course, every man will hold by his own consciousness.” (James, 1894, p. 524; 筆者訳: その際に、なぜこうした強い反論が行われるのだろうか。この理論が、彼ら批判者たちの意識体験の内容に矛盾するという指摘がなされるとき、内観によって、彼ら批判者たちが感情興奮の一部分を知覚でき、なおかつ、心身の関係性を考えたときに、その感情興奮が、神経信号の入力によって生起することは、不可能であると言いたいのであろうか。または、内観によって全身の中のどの場所であるかを特定できた身体部分が、あまりにも小さすぎて、概念化しようにも、まだはっきりと位置を特定できずにいる感情が、かなりの量にわたって存在していると言いたいだけなのか。これら二つの解釈の中で、Irons氏は前者の内容が正しいと主張しているものの、より慎重で思慮深く、支持するに値するのは、後者であると考えて間違いないだろう。こうした議論においては、もちろん、すべての人が、自分自身が体験し

た意識の内容に従おうとするだろう。)

ここでJamesが指摘していることは、JamesやLangeの学説を批判する研究者たちにとって、感情興奮が、神経活動によって生起することを否定できる根拠があるわけではなく、感情興奮に関連した身体的変化については、内観だけでは、どの身体部位で生じているのかを十分に判別できないことも多いため、自分自身の内面で生じている感情と、身体感覚との関係を明瞭に自覚できないがゆえに、JamesやLangeの感情学説を肯定できずにいるのであって、それだけの理由で、Jamesたちの感情学説を受け入れようとしただけではないかという主張であるようにと思われる。

この指摘に続いて、Jamesは、身体反応を知覚する能力の個人差とともに、実際に身体反応が小さい場合に、Jamesの仮説の中では、繊細感情として位置づけられることを説明している。“I for one shall never deny that individuals may greatly differ in their ability to localize the various elements of their organic excitement when under emotion. I am even willing to admit that the primary *Gefühlston* may vary enormously in distinctness in different men. But speaking for myself, I am compelled to say that the only feelings which I cannot more or less well localize in my body are very mild and, so to speak, platonic affairs. I allow them hypothetically to exist, however, in the form of the ‘subtler’ emotions, and in the mere intrinsic agreeableness and disagreeableness of particular sensations, images, and thought-processes, where no obvious organic excitement is aroused.” (James, 1894, p. 524; 筆者訳: 感情が生じたときに、身体的興奮のさまざまな要素が生起している身体部位を特定する能力に大きな個人差があることを、少なくとも私は否定しないだろう。一次的な体験の質について、知覚の明瞭さに関連して、かなり大きな個人差が生じうことは認めざるをえない。だが、私の考えでは、体の中のどの部分かをほとんど特定できないような体験については、ごく穏やかなものであって、いわば、プラトニックな感情であると言わざるをえない。他方、そうした感情に関して、仮説の上では、「繊細感情」として、ならびに、特定の感覚、心像、および思考の過程に内在する快や不快として存在すると私は考えており、この種の感情では、顕著な身体的興奮は生じない。)

### 3. 17 どのような体験を感情と呼ぶのか？ (批判的意見についての総括②)

どのような心理的体験を感情と呼ぶのか。一次、二次といった心理的体験の階層の中で、どこからどこまでを感情と呼ぶのか。快や不快に関連した体験のどこまでを感情に含めるのか。言語表現上、心理的体験のどこからどこまでを感情とみなすのかという問題によって、Jamesの学説を批判する動きがあったようであり、これらの問題は、突き詰め行くと、感情という心理状態をどのような言語表現を用いて定義するかという点に行き着くと、Jamesは考えていたのかもしれない。この言語表現の問題について、Jamesは次のように述べている。“This being the case, it seems almost as if the question had become a verbal one. For which sort of feeling is the word ‘emotion’ the more proper name—for the organic feeling which gives the rank character of commotion to the excitement, or for that more primary pleasure or displeasure in the object, or in the thought of it, to which commotion and excitement do not belong? I myself took for granted without discussion that the word ‘emotion’ meant the rank feeling of excitement, and that the special emotions were names of special feelings of excitement, and not of mild feelings that might remain when the excitement was removed. It appears, however, that in this assumption I reckoned without certain of my hosts.” (James, 1894, p. 525; 筆者訳: こうした状況であるために、ここで議論している問題は、あたかも言語的な問題になったように思われる。感情(emotion)という単語について、どのような種類の体験を表現する名称として用いることが望ましいのか。身体的な知覚であり、身体的な興奮が生じたときに、階層構造における反応の位置づけを与えるものを表現するのが良いのか。あるいは、さらに基本的なものとして、対象の出現に対する快や不快を表現するのが良いのか。さらには、快や不快に関する思考に用いるべきであって、このときには、身体的な反応や興奮を含めないことが望ましいのか。「感情」という言葉が、興奮に関連した階層的な体験を意味すること、および、感情とは、それぞれに特有の興奮体験につけられた名称であって、興奮が取り除かれた後に残存するかもしれない、穏やかな体験を表すものではないことが、当然のことであって、議論するまでもないだろうと私は考えている。だが、この仮定においては、私の当初の予測が外れた部分もあったようだ。)

これに続いて、Worcesterからの批判を取り上げている。“Dr. Worcester’s quarrel with me at the end of his article becomes almost exclusively verbal. All pleasure and pain, he says, whether primary and of the higher senses and intellectual products, or secondary and organic, should be called ‘emotion’ (296). Pleasure or pain revived in idea, as distinguished from vivid sensuous pleasure and pain, he suggests to be what is meant by emotion ‘in the sense in which the word is commonly used’ (297); and he gives an array of cases in point.” (James, 1894, p. 525; 筆者訳: Worcester博士は、彼の論文の最後で私に反論しており、これはほとんど言葉についての議論である。すべての快と苦痛については、一次的で、高次感覚と知的活動によって生じたものなのか、もしくは二次的で、身体的なものであるかにかかわらず、いずれも「感情」と呼ぶべきだと彼は述べている。観念の中で再生される快と苦痛は、鮮明な感覚を伴う快や苦痛とは区別することができ、感情と呼ばれるものに相当すると彼は述べている。これは、感情という言葉が一般的に使われるときの意味に相当する。さらに、彼は、適切な事例をいくつか挙げている。)

この後、Jamesは、この批判的意見の具体的内容として、Worcesterの記述内容を引用している。“Suppose that I have taken a nauseous dose and made a wry face over it. No one, I presume, would question that the disagreeableness lay in the unpleasant taste, and not in the distortion of the countenance. Now suppose I have to repeat the dose, and my face takes on a similar expression, at the anticipation, to that which it wore when I took it originally. How does this come about? If I can trust my own consciousness, it is because the vivid reproduction, in memory, of the unpleasant taste is itself unpleasant. . . . If this be the fact, what can be more natural than that it should excite the same sort of associated movements that were excited by the original sensation? I cannot make it seem any more credible that my *repugnance* to a repetition of the dose is due to my involuntary movements than my discomfort in taking it originally was due to the similar movements that occurred then. . . . I hardly think that any one who will consult his own consciousness will say that the reason he likes the taste of an orange is that it makes him laugh or smile to get it. He *likes* it because it tastes good, and

is sorry to lose it for the same reason.” (James, 1894, p. 525; 筆者訳:もし私が嘔吐を催す薬を飲み、苦痛の表情を浮かべたとしよう。この不快な反応は、味が悪いことによるもので、表情のゆがみによって生じたとはだれも思わないだろうと思う。次いで、もし同じ薬をまた飲まなくてはならなくなって、それを予期したために、それを最初に飲んだときと同様の表情になったと仮定しよう。なぜこのようなことが生じたのだろうか。自らの意識を信用できるとすれば、その理由は、味の悪さに関する鮮明な記憶の再生自体が不快であるためであり、(中略)これが事実であるとすれば、最初のときには感覚刺激によって、関連する運動反応が生じており、これと同様の反応が、不快な味覚刺激によって再び生起するという説明の内容以上に、自然な考え方はあるだろうか。薬を繰り返し飲むことへの嫌悪が生じるのは、不随意筋の働きによるものであるという考え方を、どれだけ信頼できるかについて考察するとき、最初にその薬を飲んだときの不快感が生じるのは、そのときに生じた、同様の運動反応によるものであるという考え方と比べて、より大きな信頼を置くことができそうであるなどは、私には考えることができない。(中略)自分自身の意識に照らして、オレンジの味が好きである理由が、それを手に入れたことで、笑ったり、微笑んだりするからだなどと言う人がいるとは考えにくい。その味が気に入っているから、オレンジが好きなのであって、同様の理由のために、オレンジをなくしてしまったときに残念に思うのである。)

Worcesterの想定した、快と不快に関連した事例の説明を受けて、Jamesは次のように述べている。“Now, accepting Dr. Worcester's description of the facts, I remark immediately that the nauseousness and pleasantness are due to incoming nerve-currents—at any rate in the cases which he selects—and the feeling of the involuntary movements as well; so whatever name we give to the phenomena, so far they fall comfortably under the terms of my theory. The only question left over is what may be covered by the words ‘repugnance’ and ‘liking,’ which I have italicized, but which Dr. Worcester does not emphasize, as he describes his instances. Are *these* a third sort of affection, not due to afferent currents, and interpolated between the gustatory feelings and reactions which are so due? Or are they a name for what, when carefully considered, resolves itself into more delicate reactions still? I privately

incline to the latter view, but the whole *animus* of my critic's article obliges me to attribute to him the opinion, not only that the like and dislike must be a third sort of affection not grounded on incoming currents, but that they form the distinctive elements of the ‘emotional’ state of mind.” (James, 1894, p. 526; 筆者訳:Worcester博士が想定した事例の説明を受けて、彼が選んだ事例ではいずれも、嘔吐と快が、神経興奮の入力、および、不随意反応の体験によって生じることを、ここで指摘しておきたい。この現象をどのような名称で呼ぶにせよ、これらの現象は、私の理論の条件に適合する。残された問題は、「嫌悪」や「好み」という言葉には、どのような意味が含まれるのかということである。これらの言葉を、[上述のJamesによる引用の中では]イタリック体で表記したものの、Worcester博士は、実例を述べるにあたって、特に強調して表現してはいない。これらは、第三の種類の感情であって、求心性の神経興奮によって生じるものではなく、消化器系の感覚と、そこから生じた反応との中間において生起するものなのか。または、注意深く考える中で、さらに微細な反応へと変わってしまった場合に用いる名称なのだろうか。私は個人的には後者の考え方を支持するほうに傾いているものの、私の学説に対して批判的である、この研究者の論文に認められる批判的内容の全体を受けて、好き嫌いの問題が、第三の種類の感情であって、神経興奮の入力を基盤としたものであるはずがないという考えだけでなく、好き嫌いこそが、心の「感情」状態における主要な要素になっているという考えを、この研究者が持っているのではないかと考えざるを得ない。)

Jamesの推測によれば、彼の学説に対して批判的な研究者の一人であるWorcesterは、感情の中核には、好きか嫌いかという感情価 (valence) があると考えているのではないかとのことである。感情体験全体の中で、感情価の問題だけを強調してしまうと、身体反応に関連した、末梢から脳へと向かう求心性神経の作用の役割は、さほど重要ではなくなってしまうということであろう。現代の感情理論の中では、感情価だけでなく、興奮ないし覚醒の量的な次元を重視し、感情価と覚醒の双方を感情の基本要素としてみなす考え方がある。例えば、Russell (1980) の円環モデルにおいては、「快—不快」と「覚醒—睡眠」という2つの次元を想定しており、さらに、同じRussellが提唱したコア・アフェクト理論においては、「快—不快」と合わせて、「活性—不活性」という興奮に関連した次元を想定している (Feldman

Barrett & Russell, 1998; Russell & Feldman Barrett, 1999)。このようなJames以後の感情次元の研究成果を踏まえれば、仮に、Jamesの指摘するように、彼の学説を批判する研究者が、感情体験の要素として、好き嫌いばかりを重視しようとする立場であったのだとすると、感情現象を考えるにあたって、視野が過剰に狭窄してしまっていたと結論づけることができよう。

これに続いて、Jamesは、言語表現の問題に関する議論から、Jamesの仮説を一定の方法によって検証することへと、話題を大きく転換している。“The whole discussion sharpens itself here to a point. We can leave the lexicographers to decide which elements the word ‘emotional’ belongs to; for our concern is with the facts, and the question of fact is now very plain. Must we (under any name) admit as an important element in the emotional state of mind something which is distinct both from the intrinsic feeling-tone of the object and from that of the reactions aroused—an element of which the ‘liking’ and ‘repugnance’ mentioned above would be types, but for which other names may in other cases be found? The belief that some such element does exist, and exist in vital amount, is undoubtedly present in the minds of all the rejectors of the theory in dispute. Dr. Worcester rightly regrets the deadlock when one man’s introspection thus contradicts another’s (288), and demands a more objective sort of umpire. Can such a one be found? I shall try to show now that it possibly has been found; and that Dr. Sollier’s recent observations on complete anaesthetics show that in some persons at least the supposed third kind of mental element may exist, if it exists at all, in altogether in appreciable amount.” (James, 1894, p. 526; 筆者訳:ここまで議論してきた内容全体を踏まえて、ここで特に重要な点に絞って議論を行いたい。感情という単語にどれだけの要素を含めるかについては、辞書編集者に任せておいても良いだろう。われわれの関心は、事実を検証することであって、事実を検証する問題は、きわめて明白で単純なものである。(どのような名称を使うにせよ)心の感情状態における重要な要素として、対象が本質的に有する体験の質や、そこで生じた反応に関する体験の質のいずれとも明確に区別できるものが存在することを認めなくてはならないのだろうか。ここでいう反応の要素とは、上述のような好き嫌いを典型とするものの、他の場合には別な名称が使われているかもしれない。

そのような要素が実際に存在し、なおかつ、かなり重要な意味を持つほどの分量で存在するという考えが、現在議論している理論を拒否しようとする人たちの心すべてに広く存在することは確かなようだ。Worcester博士は、誰かの内観が、別な人のものと矛盾していたときに行き詰まりになってしまうことを懸念して、もっと客観的な検証方法が必要だと論じている。そんな検証方法は見つかるのだろうか?筆者は、有効かもしれない検証方法をすでに見つけているので、ここで紹介したい。Sollier博士の全身の麻痺に関する最近の観察によれば、想定されている第三の種類 of 心的要素が、仮に、こうした要素が実際に存在するという前提ではあるものの、少なくとも一部の人には存在しており、十分に感知することが可能であるかもしれない。) )

次のセクションでは、この段落の最後に述べられているように、Jamesは、彼の感情理論を検証する上で有効だろうと考えている検証方法として、Sollierの症例<sup>8)</sup>を含め、全身の麻痺に関連した症例をいくつか取り上げている。他の症例に比べて、Sollierの症例が、Jamesの感情理論を検証する上で、特に重要な意味を持つと、Jamesは考えていたようである。

### 3. 18 全身が麻痺した症例 (Berkleyの2人の症例)

言語表現に関連した議論に続いて、他の研究者による症例報告の知見が紹介されている。この部分が、Psychological Review論文の後半部分に配置されているのは、単なる偶然ではなく、Jamesにとって、もっとも議論しておきたい内容であって、その知見に基づき、この論文の最終的な結論を直接的に導くことができると考えたのではなかったかと筆者には思われる。このように思う理由として、ここでの議論は、このPsychological Review論文の10年前に発表された、Mind誌の論文の中で、Jamesが提起していた、彼の仮説の検証方法に関わる議論であり、別な言い方をすれば、James、さらには、Langeが提示していた感情に関する作業仮説の真偽を検証するための議論でもあった。Jamesは、彼自身のMind誌の論文 (James, 1884) で提起した問題を引き合いに出しながら、次のように述べている<sup>9)</sup>。“In my original article I had invoked cases of generalized anaesthesia, and admitted that if a patient could be found who, in spite of being anaesthetic inside and out, could still suffer emotion, my case would be upset. I had quoted such cases as I was aware of at the time of

writing, admitting that so far as appearances went they made against the theory; but I had tried to save the latter by distinguishing between the objective reaction which the patient makes and the subjective feeling which it gives him.” (James, 1894, p. 526; 筆者訳:私が書いた論文の中で、全身の麻痺の症例報告を要請し、もし完全な全身性の麻痺のときでも、感情を経験する患者を見つかることができたなら、私の考え方は否定されてしまうだろう。この論文を書いていた当時に知っていた症例を引用し、報告の文章をざっと読むかぎりには、この理論にとって不利になるような事例の存在も認めてきた。だが、後者[つまり、Jamesの学説]について擁護するべく、患者が示した客観的反応と、反応から生じた主観的な体験とを明確に区別することを心がけた。)

このような導入に続いて、Jamesが期待するような症例は、残念ながら、これまでに多くは報告されてこなかったことが記述されている。“Since then a number of cases of generalized anæsthesia have been published, but unfortunately the patients have not been interrogated from the proper point of view. The famous ‘theory’ has been unknown to the reporting doctors.” (James, 1894, pp. 526-527; 筆者訳:それ以後、全身性の麻痺の多くの症例が公表されてきたものの、残念ながら、そこで報告された患者たちは、適切な方法を用いて問診を受けていなかった。著名な「理論」については、症例報告をした医師たちに知られていなかったのだ。)

Jamesは、彼自身の感情学説が著名なものになった自覚していた一方で、この学説の真偽を検証するための症例報告が集まらないことに、やや不満であったのかもしれない。

ただし、Jamesにとって不幸なことばかりが続いたわけではなかったようだ。つまり、彼にとって、非常に重要な意味を持つ症例が、いくつか報告されていた。最初に、Berkleyの2人の患者の症例が紹介される<sup>3)</sup>。これらの症例報告については、WorcesterがJamesの学説を批判するために引用したとのことであり、一人目の症例について、次のように紹介されている。“The first patient was an Englishwoman, with complete loss of the senses of pain, heat and cold, pressure and equilibrium, of smell, taste, and sight. The senses of touch and of position were not completely gone, but greatly impaired, and she could hear a little. As for visceral sensations, she had had no hunger or thirst for two years, but she was warned by feeling of the evacuative needs. She laughs at

a joke, shows definitely grief, shame, surprise, fear, and repulsion.” (James, 1894, p. 527; 筆者訳:最初の患者はイギリス人女性であり、痛覚、温覚、および冷覚、圧覚と平衡感覚、嗅覚、味覚、および視覚を完全に失っていた。触覚と位置感覚は完全に失われたわけではなかったものの、大幅に失われていた。音を聞くことは少しできた。内臓感覚に関して、飢えと渇きをかれこれ2年ほど経験しておらず、排便に際して、便意を感じることはできた。冗談を聞いて笑い、明らかな悲しみ、恥じらい、驚き、恐れ、および嫌悪の感情を示す。)

さらに、Jamesは、この症例に関連して、BerkleyがWorcesterに宛てて書いた手紙の内容の一部として、次のような記述を紹介している。“My own impression derived from observation of the patient, is that all mental emotional sensibilities are present, and only a little less vivid than in the unanæsthetic state; and that emotions are approximately natural and not at all coldly dispassionate.” (James, 1894, p. 527; 筆者訳:「この患者を観察して得た私自身の印象としては、精神面での感情的感受性はすべて保たれており、麻痺のない状態と比べても、感情的性質は、少しだけ鮮明さを欠く程度である。感情は、おおよそ自然であり、感情の生じない状態ではまったくくないといえる。)

先に述べたように、Jamesの学説に反論しようとしていたWorcesterにとっては、この症例の内容だけでなくBerkleyからのこのようなコメントも、James学説批判のために援用できると考えたのだろう。

次いで、Jamesは、Worcesterが引用したという、Berkleyの第二の症例を簡単に紹介している。“The second case was that of a Russian woman with complete loss of cutaneous, and almost complete loss of muscular, sensibility. Sight, smell, hearing preserved, and nothing said of visceral sensation (in Dr. Worcester's citation). She showed anger and amusement, and not the slightest apathy.” (James, 1894, p. 527; 筆者訳:2つ目の症例は、ロシア人の女性であり、皮膚の感覚を完全に喪失し、筋肉の感覚をほぼ完全に喪失していた。視覚、嗅覚、聴覚は保たれており、内臓感覚については何も記述されていない(Worcester氏の引用の中では)。この患者には、怒りや楽しみの感情が認められ、無気力などは全く認められない。)

このような簡単な説明に続いて、Jamesは、この第二の症例は、彼の感情学説を検証するための議論に役立てるためには、記録が不十分であると考えたようであ



り、ほとんど詳細なコメントを与えずに、第一の症例へと議論が戻して、次のように述べている。“This last case is obviously too incompletely reported to serve; and in the preceding one it will be noticed that certain degrees of visceral and of muscular sensibility remained. As these seem the important sorts emotionally, she may well have felt emotion. Dr. Berkley, however, writes of her ‘apathy’; and it will be noticed that he thinks her emotions ‘less vivid than in the unanaesthetic state.’” (James, 1894, p. 527; 筆者訳:この後者の症例は、報告内容が不十分であることが明らかである。先に述べた症例では、内臓感覚と筋肉の感覚がある程度保たれていたことにお気づきになるだろう。これらのことは、感情にとって重要な性質のように思われ、この患者はおそらく感情を体験しうるのだろう。だが、彼女の「無気力」についてBerkley博士は述べている。彼女の感情が、「麻痺のない状態と比べて、少しだけ鮮明さを欠く」とBerkley博士が考えていたことにもお気づきだろう。)

元々は、WorcesterがJamesの学説を批判すべく引用した、Barkleyの症例報告であったものの、Jamesはこれを逆手にとって、感情が、「麻痺のない状態と比べて、少しだけ鮮明さを欠く」とBerkleyも述べている点を指摘し、James自身の学説の補強材料にしようと試みたのではないだろうか。このBerkleyの症例報告が、Jamesの学説の補強材料に実際になっていたかどうかはさておき、Jamesの学説を否定する材料には少なくともなっていないように、これに続けて、Jamesはさらに、別な症例について紹介している。

### 3. 19 全身が麻痺した症例(Sollierの症例)

Berkleyの症例の紹介に続いて、Jamesは、Sollierの二人の患者の症例を取り上げている。後述するように、このSollierの二人の症例の内容について、Jamesは、自らの感情学説を支持する根拠として利用しようとしたようである。最初に、これらの症例の概要が説明されている。“In Dr. Sollier's patient the anæsthesia was far more complete, and the patient was examined for the express purpose of testing the dependence of emotion on organic sensibility. Dr. Sollier, moreover, experimented on two other subjects in whom the anæsthesia was artificially induced by hypnotic suggestion. The spontaneous case was a man aged forty-four; the hypnotic cases were females of hysteric constitution.” (James, 1894, p. 527; 筆者訳:Sollier博士の患者で

は、麻痺の程度がかなり重度であって、患者の感情が、身体感覚の能力にどれだけ依存しているかを検証する目的で、検査を受けていた。Sollier博士は、さらに、他の別な2名の被験者に対して実験を行っており、これらの被験者では、催眠の暗示によって感覚の麻痺が、人為的に生じていた。[麻痺が]自然に発症した症例は44歳の男性であり、催眠の症例は、ヒステリー性格の女性たちであった。)

最初の症例は、重度の感覚の麻痺の患者であって、身体感覚の機能と感情状態との関連を明らかにするための検査を受けていた。他方、別の2人の被験者の事例では、催眠の暗示によって、感覚の麻痺の症状があらわれていた。Jamesは最初に、重度の感覚麻痺の症例を取り上げている。“In the man the anaesthetic condition extended so far that at present every surface, cutaneous and mucous, seems absolutely insensible. The muscular sense is wholly abolished; the feelings of hunger and satiety do not exist; the needs of defecation and micturition are unfelt; taste and smell are gone; sight much enfeebled; hearing alone is about normal. The cutaneous and tendinous reflexes are lacking. The physiognomy has no expression; speech is difficult; the entire muscular apparatus is half paralyzed, so that locomotion is almost impossible.” (James, 1894, pp. 527-528; 筆者訳:男性の患者では、麻痺の状態がさらに深刻なものであって、皮膚や粘膜といった、すべての体表の感覚が、現時点で、ほとんどないようである。筋肉の感覚は、まったく失われている。空腹や満腹の感覚もない。便意や尿意の感覚もない。味覚と嗅覚もない。視覚はかなり弱い。聴覚だけはほぼ正常である。皮膚や腱の反射は失われている。表情を見ても変化はない。会話は困難である。全身の筋肉は半分程度麻痺しており、その結果、歩行もほとんどできない。)

これに続いて、Sollier(1894)の論文における症例の説明に関する英訳が記されている。その主な内容を述べておくと、この患者は、自分自身の心臓や呼吸器の活動について知覚できないことを含め、多くの感覚が失われている一方で、驚いたり、感動したりすることはなく、“His state of apathy, of indifference, of extreme emotionlessness, has developed slowly *pari passu* with the anæsthesia.” (James, 1894, p. 528; 筆者訳:無気力、および無関心の状態で、感情もまったくない状態であり、麻痺の症状が進行するにつれて、無気力などの症状も徐々に進行して悪化している)とSollierは述べ

ている。そして、Sollierはこれに続けて、次のように述べている。“His case realizes, therefore, as completely as possible the experiment desiderated by W. James.” (James, 1894, p. 528; 筆者訳:それゆえに、この症例は、W. Jamesが待ち望んだ、ほぼ理想通りの実験的な検証を可能とするものである。)

この最後の一文を見る限り、Sollierは、Jamesの仮説について知っただけでなく、Jamesの仮説の検証を実現するために、この1894年の論文を著したと考えることができるだろう。そして、後述するように、Sollier (1894)の論文を読んだJamesは、同じ年のうちに、このPsychological Review誌に掲載された論文を発表することとなる。これは、筆者の憶測にすぎないけれども、Jamesが偶然にSollierの論文を見つけて、たまたま発表の時期が同じ年になったというよりはむしろ、このSollierの論文の知見を強力な補強材料として、彼の感情学説の基盤をよりいっそう固めるべく、新たな論文の執筆を思い立った可能性もあるのではないだろうか。

### 3. 20 催眠誘導の事例(Sollierの事例)

Sollierの一人目の症例に続いて、Jamesは、同じくSollierの催眠誘導の事例について紹介している。先に述べたように、この二人の被験者は、催眠の暗示によって内臓などの感覚を体験できなくなっていた。Jamesは、これらの事例について、次のように述べている。“In the hypnotic experiments, Dr. Sollier provoked in his subjects sometimes visceral and sometimes

peripheral anaesthesia, and sometimes both at once. He registered the organic reactions (by pneumograph, etc.) as far as possible, and compared them with those produced in the same subject when an emotion-exciting idea was suggested, first in the anaesthetic, and then in the normal state. Finally, he questioned the subject on the impressions she had received.” (James, 1894, p. 528; 筆者訳:催眠の実験において、Sollier博士は、彼の被験者に対して、内臓感覚の麻痺を生じさせたり、末梢の感覚の麻痺を生じさせたり、ときには両方を同時に生じさせたりした。身体反応を(呼吸器計などで)可能な限り記録し、感情興奮の観念に関する暗示が与えられた時点として、最初に、麻痺が生じていたとき、次いで、通常の状態のときに暗示を与えており、これらの時点の間で、同一の被験者で生じた身体反応を比較した。実験の最後には、彼[つまり、Sollier]が、被験者に対して、実験中に感じた印象について質問した。)

このときのSollierの実験結果について、JamesがPsychological Review論文で紹介している内容をTable 2に示す。このSollierの実験結果は、特に、内臓活動と感情体験との強い関係性を示しており、Jamesによれば、“When it is solely visceral, the emotion is abolished almost as much as when it is total, so that the emotion depends almost exclusively on visceral sensations” (James, 1894, p. 529; 筆者訳:麻痺が内臓の感覚だけに限定されるときには、麻痺が全身に及んだときとほぼ同様に、感情は失われてしまい、そのため、感情は内臓感覚だけにほぼ依存していることになる)とのこと

Table 2 James(1894)に示されたSollier(1894)の催眠暗示による感覚麻痺の事例の概要

主要な症状の内容
(1) 末梢[四肢]の感覚が完全に麻痺してしまうと、動くための力が、まったく入らなくなる。同時に、脚も冷たくなり、血の気が引いて青くなっている。
(2) 内臓の麻痺も加わると、患者は、もはや生きているような実感が無いと感じる。
(3) 完全な麻痺状態のときには、感覚が回復して、患者を強く動かすような幻覚や妄想の暗示を与えても、もはや通常の感情は体験できない。麻痺が完全でないときには、通常の感情は体験できないものの、心を動かすような強い観念が生じたときに頭や腹部の中に何かひらめくものがあると述べることもある。
(4) 感覚の麻痺が末梢[四肢]に限定されているとき、ほぼ同様の強度で感情は生じている。
(5) 感覚の麻痺が内臓だけに限定されるとき、麻痺が全身に及んだときとほぼ同様に、感情は失われ、その結果、感情は内臓感覚にほぼ依存している。
(6) 感覚の麻痺が内臓が麻痺しているときに、興奮するような観念を暗示すると、ごくわずかな運動反応が生じることが、呼吸記録器によって示されることがある。だが、M. Sollierは、(高度な推測に基づく理由のために)完全な無感情状態にあっては、内臓反応が生じないと考えている。

であった。このことは、身体反応を重視した、粗大感情成立のメカニズムに関するJamesの考え方を支持するというだけでなく、身体反応の中でも、特に内臓感覚の重要性を強く示唆する結果であったことにも留意すべきだろう。

### 3. 21 結論と今後の課題

このPsychological Review論文の最後の段落において、Jamesは、Sollierが報告していた上述の知見をまとめて、以下のように結論づけている。“The reader sees that M. Sollier's experimental results go on the whole farther than ‘my theory’ ever required. With the visceral sensibility not only the ‘coarser’ but even the ‘subtler’ forms of emotion depart. Some people must then be admitted to exist in whom the amount of supposed feeling that is not due to incoming currents is a negligible quantity.” (James, 1894, p. 529; 筆者訳:M. Sollierの実験結果について、全体として見れば、「私の理論」のために、これまで必要となっていたよりも、はるかに多くの内容を含んでいることを読者は理解してくれるだろう。内臓の感覚能力があれば、「粗大」だけでなく、「繊細」な形態の感情も生起する。神経興奮の入力によるものではないと考えられる感情体験の大きさが、ごくわずかだった人も存在していることを認めなくてはならない。)

つまり、Jamesは、Sollierの研究報告に基づいて、粗大、ならびに、繊細感情のいずれもが、内臓感覚の入力によって成立しようと結論している。ただし、ここで特に留意すべき点は、Jamesが、他の感覚以上に、内臓感覚を重視した点である。

他方で、Jamesは、1884年のMind誌の論文の中では、内臓の役割と骨格筋の役割の重要性をほぼ同等であると考えていたようだ。Jamesは、Mind誌の論文の中で、感情における身体反応の重要性の違いの説明の中で、次のように述べている。“That the heart-beats and the rhythm of breathing play a leading part in all emotions whatsoever, is a matter too notorious for proof. And what is really equally prominent, but less likely to be admitted until special attention is drawn to the fact, is the continuous co-operation of the voluntary muscles in our emotional state” (James, 1884, p. 192; 筆者訳:心臓の拍動や呼吸のリズムが、すべての感情において主要な役割を果たすという点については、あえて証明するまでもないくらいによく知られていることである。そして、

これらと同様に重要な役割を果たしているものの、よく注意を向けていないとわかりにくいのが、感情状態における随意筋の絶え間ない協働的な作用である。)

この記述からは、この随意筋の活動について、この当時のJamesが、心臓や呼吸器といった内臓活動に次ぐ、準主役級の役割を果たす感情の規定因として位置づけていたことが明らかである。この協働的な作業がどのようなものであるかという点に関連して、Jamesは、Mind誌の論文の中で、次のようにも述べている。“The hypothesis here to be defended says that this order of sequence is incorrect, that the one mental state is not immediately induced by the other, that the bodily manifestations must first be interposed between, and that the more rational statement is that we feel sorry because we cry, angry because we strike, afraid because we tremble, and not that we cry, strike, or tremble, because we are sorry, angry, or fearful, as the case may be” (James, 1884, p. 190; 筆者訳:ここで提示した仮説の中で主張している内容としては、因果関係の順番が逆であり、心的な状態は、別な心的状態によって直接生じるのではなく、身体の反応が、個々の心的状態の間を仲介するといったことである。もっと合理的に説明するならば、声をあげて泣くから悲しいのであり、相手を殴るから怒りを覚えるのであり、体が震えるから恐れを感じる。悲しんだり、怒ったり、恐れたりするがゆえに、泣いたり、殴ったり、震えたりするのではない。)

この文の中でも「泣くから悲しい」という一節は特に有名であるけれども、この当時のJamesは、心臓活動や呼吸器の活動などの内臓活動と合わせて、声を上げて嘆いたり、誰かを殴ったりといった随意的運動が協働的に働きながら、感情の成立過程において重要な役割を果たすと考えていたようである。

上述のような、1884年に出版されたMind誌の論文の内容と比較したとき、1894年のPsychological Review論文の内容において、感情体験の成立過程の中で、さまざまな身体反応がそれぞれ、どれだけの影響を及ぼすかという優先順位に明らかかな変化があったようだ。つまり、Jamesの優先順位の中で、随意筋が、その準主役級の役割を奪われてしまったようにも考えられる。

実は、1884年から1892年までの著作の間では、粗大感情の生成メカニズムに関しては、顕著な変更は認められなかった。これに関連して、拙論(佐藤, 2022b)でも指摘した通り、Mind誌の論文(James, 1884)、The Principles of Psychology(James, 1890)、ならびに

Briefer Course (James, 1892) の内容の間で、繊細感情の生成メカニズムに関する議論には顕著な変化を認めた一方で、粗大感情の生成メカニズムに関する議論の内容は、大きな変化を認めず、ほぼ同一の内容であった。Jamesは、彼の感情学説10周年となる時点で発行された、このPsychological Review論文において、Sollierの症例報告に基づいて、粗大感情の生成メカニズムに新たな修正を加えたと考えて良いだろう。

粗大感情の生成メカニズムに関する議論に次いで、Jamesは、Sollierの研究報告に関する方法論的な問題を指摘して、読者の注意を喚起している。“Of course we must bear in mind the fallibility of experiments made by the method of ‘suggestion.’ We must moreover remember that the male patient's inemotivity may have been a co-ordinate result with the anaesthesia, of his neural lesions, and not the anaesthesia's mere effect.” (James, 1894, p. 529; 筆者訳:もちろん、「暗示」の方法を用いたことによって、実験における問題が生じる可能性があったという点に留意しなくてはならない。さらに、男性の患者の非感情性が、麻痺を伴った神経の損傷による結果であって、麻痺だけの影響によるものではないことを考慮する必要がある。)

ここで、Jamesからは、暗示を用いた方法に伴う問題点に加えて、男性患者の症状の背景として、神経系の障害があったこと、すなわち、感情体験の問題が生じるにあたっては、脳神経系機能が直接に関わっている可能性があることが指摘されており、これは、Jamesの学説を支持する重要な知見の弱点を、あえて積極的に示したということになってしまうものの、彼自身の学説の正当性を、学術的な観点から、慎重に検討しているとするJamesの姿勢が反映されていたのではないだろうか。

この問題点の指摘に続いて、Jamesはこの論文を締めくくる内容として、次のように述べている。“But nevertheless, if many cases like those of M. Sollier should be found by other observers, I think that Prof. Lange's theory and mine ought no longer to be treated as a heresy, but might become, the orthodox belief. That part, if there be any, of emotional feeling which is not of afferent origin should be admitted to be insignificant, and the name ‘emotion’ should be suffered to connote organic excitement as the distinctive feature of the state.” (James, 1894, pp. 529; 筆者訳:だが、それにもかかわらず、M. Sollierの事例と同様の事例について、他の研

究者の観察からも多く見出すことができれば、Lange教授の理論と私の理論が、もはや正統からは外れた考え方であるように扱われることはないだろうし、これらこそが正当な考え方となるかもしれない。求心性神経によって生じたものではない感情体験の一部が、もし仮にあるとするならば、こうしたものがさして重要でないものであると考えられるべきであるし、「感情」の名称が、感情状態における際立った特徴としての身体的興奮を含めた意味で用いられるべきであるだろう。)

この文章からも読み取れるように、Jamesは、今後、さらに彼の学説を支持する臨床的な知見が増えていくことで、彼の感情学説が支持されるようになるのではないかと期待していたのだろう。Jamesにとって、それほどSollierの症例報告は重要な意味を持っていたと考えられる。

他方、この文章の中で、筆者の印象に強く残ったのは、今後、自らの学説だけでなく、Langeの学説にも同様に、その主張内容の正しさが認められ、高い評価を得るのではないかと述べている点である。このPsychological Review論文の中でもJamesが、Langeの学説の一部、すなわち血管運動性の作用を重視しすぎているとして明確に批判していたことはすでに指摘した。だが、それにもかかわらず、Jamesは、Langeの学説の全体を否定しようとしていたわけではなく、むしろ、ほぼ同じ内容を主張している同類の学説であるかのように考えていることが、上記の文章からも明らかである。

## 4. Psychological Review論文におけるJamesの感情学説の修正と発展

### 4.1 Jamesの感情学説の修正

Psychological Review論文における議論の内容を確認すると、繊細感情に関する議論は少なく、繊細感情の生成メカニズムに関する内容については、ほとんど変更がなかったと思われる。他方で、粗大感情の生成メカニズムについては、次のような点で、Jamesの感情学説が修正されていた<sup>10)</sup>。

- 1) 感情成立において、内臓反応がもっとも重要な役割を果たす
- 2) 随意筋の運動反応は、状況によっては、感情成立のための重要な要素ではない

これらの2点については、催眠の症例に基づく知見や、随意筋の活動が感情生起に関することへの批判

的意見に基づいている。その概要について、以下に述べる。

#### 4. 1. 1 感情成立において、内臓反応がもっとも重要な役割を果たす

Table 2に示したSollierの実験結果を見ればわかるように、Sollierの症例のうち、催眠の暗示を与えた症例報告では、内臓活動と感情体験との強い関係性を示しており、Jamesは、次のように結論づけている。“When it is solely visceral, the emotion is abolished almost as much as when it is total, so that the emotion depends almost exclusively on visceral sensations” (James, 1894, p. 528; 筆者訳:麻痺が内臓の感覚だけに限定されるときには、麻痺が全身に及んだときとほぼ同様に、感情は失われてしまい、そのため、感情は内臓感覚だけにほぼ依存していることになる。)

この知見は、粗大感情成立のメカニズムに関するJamesの考え方を支持するというだけでなく、身体反応の中でも、特に内臓感覚の重要性を強く示唆する結果であった。

これと関連して、本論の3.9で取り上げたWorcesterからの批判において、Jamesは、“invisible visceral ones seem by far the most essential” (James, 1894, p. 529; 筆者訳:直接観察できない内臓反応がもっとも本質的な反応であるように思われる)と述べており、この後で紹介されることとなったSollierの知見に基づいた、上述の議論の内容とも、ほぼ同じ内容を主張している。

粗大感情の成立のメカニズムに関するJamesの初期の学説の中では、内臓活動と同様に、随意筋の活動も同等に重視していた。本論の3.21で筆者が指摘したように、Jamesは、1884年のMind誌の論文の中では、内臓の役割と骨格筋の役割の重要性をほぼ同等であると考えていたようだ。そのため、このPsychological Review論文の内容では、内臓感覚の役割を特に重要視した主張がなされていた点において、初期の学説から明らかな修正が行われていると考えて良いだろう。

#### 4. 1. 2 随意筋の運動反応は、状況によっては、感情成立のための重要な要素ではない

すでに繰り返して述べているように、Mind誌の掲載論文 (James, 1884) などでも確認するが、Jamesの初期の学説において、粗大感情の成立において、腕や脚の随意筋の役割は重要視されていた。だが、このPsychological Review論文において、この随意筋の役

割の重要性に関する認識に関して、二つの理由から大きく変わっている。

随意筋の役割の重要性に関する評価が大きく低下した理由の一つは、Table 2の示すSollierの症例報告の「(4) 感覚の麻痺が末梢[四肢]に限定されているとき、ほぼ同様の強度で感情は生じている」という知見に関連している。この(4)の知見に従えば、四肢の感覚が麻痺していても、感情の強度に影響しないという。つまり、四肢の感覚は、感情体験にさほど貢献していない可能性があるということである。

次いで、随意筋の役割の重要性に関する評価が低下した第二の理由は、本論3.9で取り上げていたWorcesterの批判に関連している。Worcesterの指摘の中では、まったく異なる行為から、同一の感情が生じるという事例として、にわか雨が降りだして、濡れるのを恐れる人の中には、雨宿りできる場所まで走る人もいれば、近くの店で傘を買う人もいるけれども、いずれの人も雨で濡れることを恐れるという同一の感情が生じていることが述べられている。Jamesはこの批判に対して、“Whatever the fear may be in such a case it is not constituted by the voluntary act.” (James, 1894, p. 519; 筆者訳:そのような状況での恐れは感情がどのようなものであれ、その本質的な要素は、自発的な運動反応ではない)と述べて、随意的な運動反応を重要視しない代わりに、内臓反応の重要性を最高度のものとして位置づけている。

## 4. 2 Jamesの感情学説の発展

JamesのPsychological Review論文の内容の中で、それ以前の論文や著書の中の記述と比べて、議論の内容が大幅に発展したと考えられるのが、主観的な体験の側面に関する議論である。具体的な改善点は次の2点である。

- 1) 感情の生起には動機づけが必要である
- 2) 連合による状況の認知の影響

ここでは、感情の主観的体験の内容に関して、内観主義心理学(もしくは要素主義心理学)と、連合主義心理学の枠組みに合わせて説明しようと試みている点で、それまでの著作にはなかった新たな進展を認めることができるだろう。Wundt, Worcester, Irons, およびLehmannの批判的意見に対応する過程において、Jamesの感情学説の内容の中でも、主観的体験の側

面についての考察が深められたと考えられる。上記の2点について、本論の各項目の説明とも重複するものの、以下に要点をまとめておきたい。

#### 4. 2. 1 感情の生起には動機づけが必要である (認知的ラベリングとの関連)

この点については、本論3.5で指摘したように、後年の感情の二要因説(Schachter & Singer, 1962)とも深く関わる考えであったと思われる。本論3.5で取り上げたWundtの批判の中では、同一の対象物であっても、同じ感情が生じない場合があり、そのような場合には、異なる感情が生起したり、もしくは、いかなる感情も生起しないということがありうるという点が指摘された。このような批判に対して、Jamesは、感情が成立する要件として、心理的な動機づけ(the mental motivation)が必要であると答えている。われわれの感情は、身体反応だけで成立するわけではなく、心理的な動機づけ、ないし、現代の心理学の用語に置き換えれば、「認知的なラベリング」、つまり、対象を恐怖の対象として認知するかどうかが必要の要件であるということの意味しているのだろう。上述のように、この考え方は、後の心理学において提唱された、感情の二要因説、もしくは感情の認知説(Schachter & Singer, 1962)の内容とも深く関連しているように思われる。そのように考えれば、Wundtからの批判への対応を通じて、Jamesの感情理論における主観的体験の側面の理解について、大きな進展があったと考えて良いのではないだろうか。

また、本論の3.11で取り上げたように、感情における主観的体験と身体的変化との間の非一貫性に着目したLehmannからの指摘に対して、Jamesは、感情を「動機のある」感情と「動機のない」感情とに分類することで反論をしている。アルコールを摂取したときなどの「動機のない」感情の場合には、このような非一貫性が高まる一方で、「動機のある」感情においては、非一貫性の程度が小さくなるとJamesは予想している。ここでの動機があるかないかという問題は、その後の感情心理学における「認知的ラベリング」に関係しているように思われる。主観的体験に着目した、さまざまな批判的意見に対応しながら、Jamesが取り上げた感情の動機の問題は、感情成立における認知の重要性へと議論が進展し、Jamesの感情学説に新たな要素を付け加えることとなったと言えるだろう。

#### 4. 2. 2 連合による状況の認知の影響

連合主義の考え方に関連しては、例えば、本論の3.7で取り上げた、「檻に入ったクマ」に対して、感情が生起しないという問題に関して、Jamesは次のように述べている。“A reply to these objections is the easiest thing in the world to make if one only remembers the force of association in psychology.” (James, 1894, p. 518; 筆者訳:これらの批判的意見に対して反論することは、この世の中で最も簡単な事柄であって、心理学における連合の作用について考えればすむことである。)

つまり、クマの知覚と合わせて、檻に入っていることや鎖でつながれているといったことも含めながら、全体の状況として知覚されることによって、われわれに恐怖の反応を引き起こさせる代わりに、楽しみなどといった別な感情の反応を生じさせる場合もありうるということである。粗大感情における身体反応が生起するメカニズムを考察するにあたり、刺激を知覚するプロセスの中に、連合の考え方を導入することによって、檻に入ったクマに対しては、恐怖の感情が生起しないという事実を、巧妙に説明することができたと考えられるだろう。

### 5. 結語

本論の中では、James(1894)のPsychological Reviewに掲載された論文の内容を検討しながら、Jamesの感情学説にどのような変化があったかを検討した。その結果、催眠による実験的な症例の知見などにに基づき、感情成立において、各器官系が果たす役割を議論する中では、内臓活動が特に重視され、その一方で随意筋の活動は、状況によっては重要でないと考えられるようになっていた。また、Wundtなどからの主観的体験に関連した批判を受けながら、感情における動機づけの問題や、連合の働きによって状況全体が感情を喚起する対象になるといった点で、Jamesの感情学説に新たな要素が付け加わっていた。

このPsychological Review論文の中で、過去の内容から修正された部分や、新たに追加された部分については、その後、Cannon(1927)によって痛烈な批判を受けることとなる部分があった一方で、感情の二要因説(Schachter & Singer, 1962)や感情の次元説(Russell, 1980, 2003)とも深く関連した議論が含まれており、これらの点に関して、現代の感情心理学において検討すべき課題を先取りして検討していたと考えることができるかもしれない。

Table 3

Jamesの4つの著作(1884, 1890, 1892, 1894)における粗大感情と繊細感情の生成メカニズムの内容に関する変化

	Coarser emotions	Subtler emotions
	(名称)	(名称)
Mind誌 (James, 1884)	“Standard emotions” (影響の大きさ) visceral $\rightleftharpoons$ voluntary muscles	“The moral, intellectual, and æsthetic feelings” (名称) “Pure cerebral emotions”
	(名称)	(名称)
The Principles (James, 1890)	“Coarser emotions”	“Subtler emotions” (生成メカニズム) Primary feeling and secondary emotions
	(No change)	(生成メカニズム)
Briefer Course (James, 1892)	(No change)	Independent of somatic and visceral processes
	(影響の大きさ) Visceral > voluntary muscles	
Psychol Rev誌 (James, 1894)	(生成メカニズム) Motivation ( $\rightleftharpoons$ Cognitive labeling?) The force of association	(No change)

また、これまでの拙論の中で、Mind誌の論文、The Principles of Psychology、Briefer Course、ならびに、本論で取り上げたPsychological Review論文の内容や、それ以前の著作の内容との比較を行ってきた結果、1884年から1894年の10年の間に、Jamesの感情学説がどのように変化してきたのかを確認できるようになった。この10年間の変化の概要をTable 3に示す。The Principles of Psychology (James, 1890)では、粗大感情 (coarser emotions) と繊細感情 (subtler emotions) という名称がそれぞれの感情に付けられ、繊細感情については、生成過程に一時的知覚 (primary feeling) と二次的感情 (secondary emotions) の2つの過程が想定されていた。これに次ぐBriefer Course (James, 1892) では、粗大感情に関する考え方については変更がなかった一方で、繊細感情に関しては、身体活動と無関係に成立するという考え方に改められた。そして、本論で取り上げたPsychological Review論文 (James, 1894) については、本論の4.1および4.2で述べたような修正事項と、新たに追加された事項とがあった。

これまでの一連の拙論における議論を通じて、Jamesが著した感情学説に関連する、すべての文献について、検討の対象としてきた。今後の課題としては、Jamesの感情学説に対して、少なからず影響を与えた著作、すなわち、LangeやWundtをはじめとした、James

と同世代の研究者たちの著作について、その内容を検討するとともに、これらの著作が、Jamesにどのような影響を及ぼしたかについても考察したいと考えている。また、James以後の研究者たちに、彼の学説がどのような影響を与えたのかについても検討していきたい。ここで取り上げるべき研究者としては、まず第一に、Cannonを候補とすべきかもしれない。こうした取り組みを通じて、JamesやLangeの感情学説が、感情心理学や感情神経科学の歴史の中で、どのような貢献をしてきたのかということを明らかにしていけるのではないかと考える。

### 文末注

- 1) 本論文以前に、James (1894) を和訳した文献としては、宇津木 (2007, 近代, 99, 1-28) がある。
- 2) Jamesは、これより前の彼の著作である“The Principles of Psychology” (James, 1890) の中では、Langeの論文の発行年を1885年として記載している。
- 3) 訳文中、角括弧内の記述は、筆者による補足を表す。これ以後の部分における角括弧内の記述も同様である。
- 4) Wundt, W. (1891). Zur Lehre von den Gemüthsbewegungen. *Philosophische Studien*, 6,

335-393.

- 5) James自身は、このように、さまざまな意味で用いられてきた歴史的経緯があるために、この統覚という用語を用いていなかったと、彼の著書(James, 1892)の中で述べている。なお、この引用文の中でWundtが用いた、統覚(Apperception)という言葉に対して、聞きなじみがあると感じた心理学関係者の方も多いただろう。申し上げるまでもなく、有名な心理検査、主題統覚検査(Thematic Apperception Test, TAT)の統覚(Apperception)を思い出される方も少なくないだろうと思う。
- 6) 『ヴェニスの商人』とは、ご存じの通り、Shakespeareの有名な喜劇の一つであり、ここで述べられている場面は第一幕の一部分に相当すると思われる。ここで紹介された登場人物について簡単に述べておくと、ヴェニスの貿易商であるAntonioは、親友の依頼によって、ユダヤ人高利貸のShylockに大金を借りる。Antonioは、キリスト教徒の間では、人格者として評判であったものの、AntonioとShylockの間には、以前から感情的な面で反目があったという(青山、2002)。
- なお、本論の議論とは離れてしまうものの、Worcesterがなぜこの喜劇の内容を引き合いに出したのかを考えてみたい。筆者の憶測に過ぎないものの、劇中のShylockの次のような台詞は、まさに、Jamesの感情学説のキーワードを含んでおり、Jamesの感情学説を読んで知ったときに連想しやすかったのかもしれない。“I am a Jew. Hath not a Jew eyes? Hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions;” (Shakespeare, *The Merchant of Venice*, Act 3, scene 1, 57-59; 筆者訳: おれはユダヤ人だ。おれたちユダヤ人に目はないというのか? ユダヤ人には手も、内臓も、体も、感覚も、感情も、情熱も一切ないというのか?) 繰り返しになるが、内臓、身体、感覚、感情、および情熱は、いずれもJamesの感情学説のキーワードである。
- 7) アドレナリンは、別名エピネフリンとも呼ばれており、交感神経系の強力な刺激物質であり、その主たる作用として、強い血管緊張性物質であり、血圧を上昇させ、心筋を刺激し、心拍数を増加させ、心拍量を増大させる(ドーランド図説医学大辞典[常用版]第28版, 1997, p. 974)。
- 8) Sollier, P. (1894). Recherches sur les Rapports de la Sensibility et de l'Émodon. *Revue Philosophique de*

*la France et de l'Étranger*, 37, 241-266.

- 9) Jamesは、Mind誌の論文の最後で次のように述べている。“Of course, this case proves nothing, but it is to be hoped that asylum-physicians and nervous specialists may begin methodically to study the relation between anesthesia and emotional apathy. If the hypothesis here suggested is ever to be definitively confirmed or disproved it seems as if it must be by them, for they alone have the data in their hands.” (James, 1884, pp. 204, 筆者訳: [先に紹介されたWinterによる症例を受けて、]もちろん、この症例からは何も明らかにはならないけれども、精神病院の医師や神経学の専門家たちに、身体的な麻痺と感情的な鈍麻との間の関連性を調べるという方法を使って検証を始めてもらうこともできるかもしれない。この仮説が正しいかどうかを確認できるかどうかは、彼ら[つまり、精神科医や神経学者]にしか扱えない問題であるように思われる。その理由は、もっぱら彼ら[つまり、精神科医や神経学者]だけが、これを検証するためのデータを収集できるからである。)このPsychological Review論文の中で、身体的な麻痺と感情的な鈍麻に関連した症例を取り上げていることから、Jamesが感情学説をMind誌に発表した後の10年間に、Jamesの感情学説の真偽を検証するためのデータが、ある程度利用できるようになったということなのだろう。
- 10) なお、本論3.4で指摘したように、血管運動性の反応について、Wundtからの批判を受けて、Langeの血管運動性の反応を重視する立場に対して批判的なコメントを述べている。さらに、Jamesは、Langeの学説のみ関連しており、Jamesの学説とは直接関係のない問題として位置づけている。しかしながら、以前の著作(James, 1890)でも、Langeの血管運動性の反応を重視する立場に関しては批判的な意見を述べており、この血管運動性に関する考え方は、このPsychological Review論文で新たに修正されたとは考えられず、以下の修正点にも含めないこととした。

## 引用文献

- 青山 誠子 (2002). ヴェニスの商人 荒井 良雄・大場 建治・川崎 淳之助(編)シェイクスピア大事典 (pp. 59-61) 日本図書センター



- Cannon, W. B. (1927). The James-Lange theory of emotions: A critical examination and an alternative theory. *The American Journal of Psychology*, 39(1/4), 106-124.
- ドーランド医学大辞典編集委員会 (1997). ドーランド 図説医学大辞典[常用版]第28版 廣川書店
- Feldman Barrett, L., & Russell, J. A. (1998). Independence and bipolarity in the structure of current affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(4), 967.
- James, W. (1884). What is an emotion? *Mind*, 9(34), 188-205. Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/2246769>
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology* (Vol. 2). New York: Henry Holt & Company.
- James, W. (1892). *Psychology: Briefer Course*. New York: Henry Holt & Company.
- James, W. (1894). Discussion: The physical basis of emotion. *Psychological Review*, 1(5), 516-529.
- Lange, C. G. (1922). The emotions: A psychophysiological study. (原題: Om sindsbevægelse: Et psyko-fysiologisk studie) (I. A. Haupt, Trans.). In K. Dunlap (Ed.), *The emotions* (pp. 33-90). Baltimore: Willams & Wilkins Company. (Original work published 1885)
- Russell, J. A. (1980). A circumplex model of affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(6), 1161-1178. doi:10.1037/h0077714
- Russell, J. A., & Feldman Barrett, L. (1999). Core affect, prototypical emotional episodes, and other things called emotion: Dissecting the elephant. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(5), 805-819. doi:10.1037/0022-3514.76.5.805
- 佐藤俊彦 (2021a). 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(1):「泣くから悲しい」という逆転の発想はどこから来たのか? 長野大学紀要, 43(1), 1-8.
- 佐藤俊彦 (2021b). 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(2):Jamesの感情学説の原点である1884年の論文について 長野大学紀要, 43(2), 113-123.
- 佐藤俊彦 (2022a). 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(3):William Jamesは“The Principles of Psychology”においてLangeの学説をどう受け止めたか? 長野大学紀要, 43(3), 173-181.
- 佐藤俊彦 (2022b). 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(4):“The Principles of Psychology”におけるJamesの感情学説の変化 長野大学紀要, 44(1), 1-16.
- 佐藤俊彦 (2022c). 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(5):“Psychology: Briefer Course”におけるJamesの感情説の変化 長野大学紀要, 44(2), 71-88.
- Schachter, S., & Singer, J. (1962). Cognitive, social, and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, 69(5), 379-399. doi:10.1037/h0046234